

月刊

AMDA

国際協力

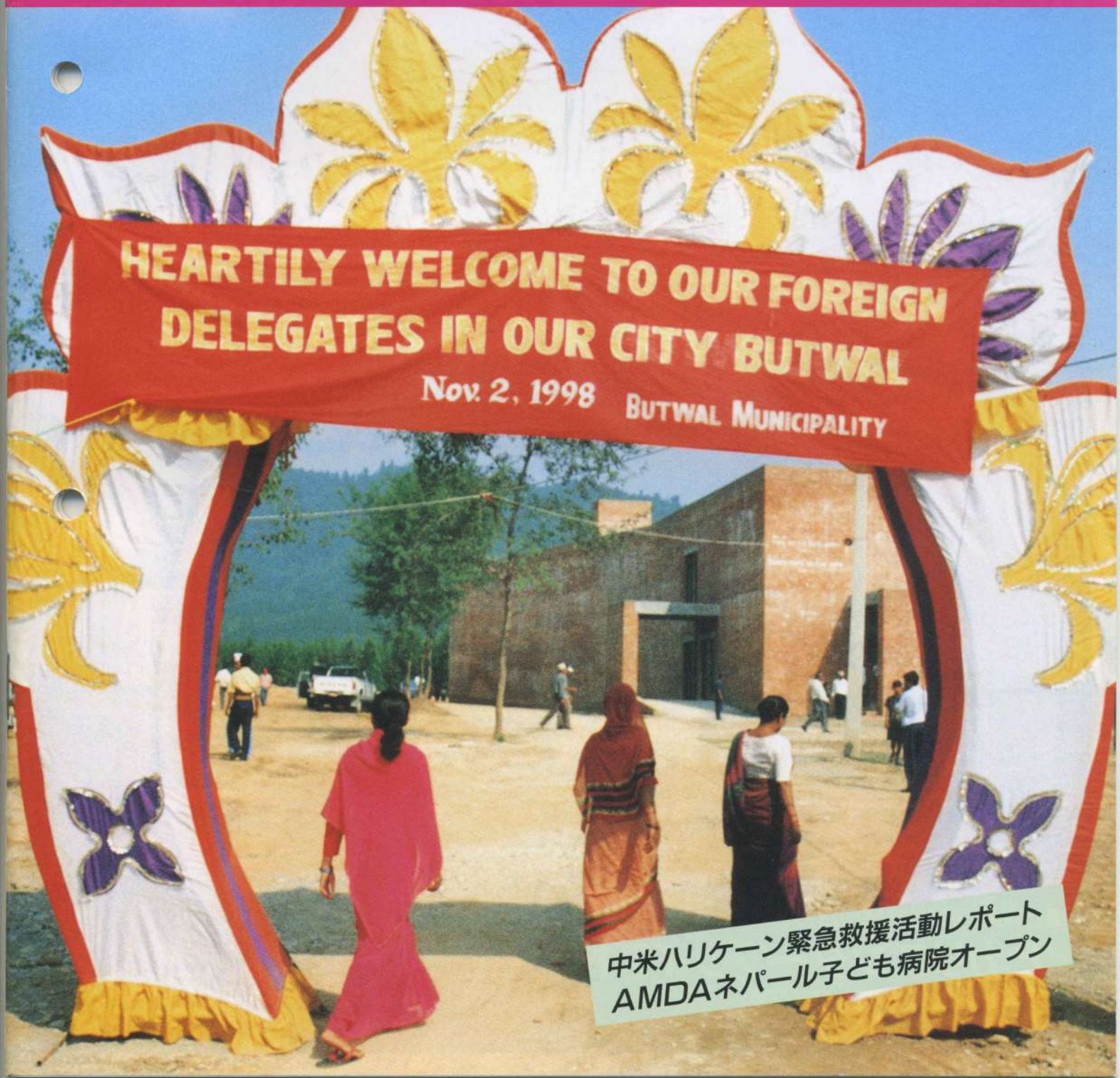
Journal

1

JANUARY

1999.1.1

(VOL.22 No.1)



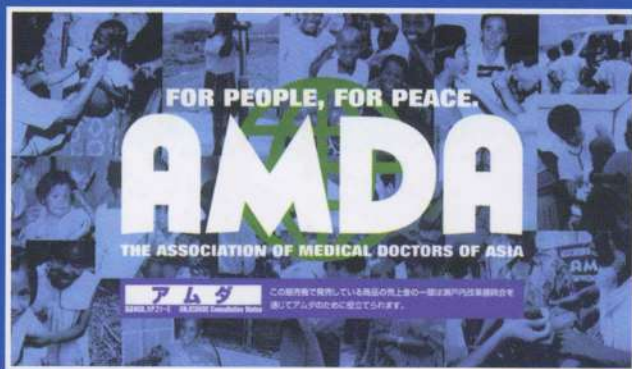
中米ハリケーン緊急救援活動レポート
AMDAネパール子ども病院オープン

世界に光を



自動販売機で AMDA を応援します

人間なのだからお互いに助け合う。「してあげるのではなく、一緒にやること」



●自動販売機のお問い合わせは…

ヒカリエンタープライズ株式会社

岡山市松新町678-11 TEL (086) 943-2228

インターネットアクセスコード <http://www.hikari-enterprise.co.jp/>

協賛

アサヒ飲料株式会社・カルピス株式会社・
キリンビバレッジ株式会社・
中国松下システム株式会社・サンデン株式会社・
富士電機冷機株式会社・三洋電機自販機株式会社

AMDA 国際協力 Journal

1999
1月号

CONTENTS



中米ハリケーン緊急救援活動報告 (ニカラグア)	2
中米ハリケーン緊急救援速報 報告 (ホンジュラス)	6
AMDA ネパール子ども病院オープンの報告	8
AMDA ネパール子ども病院外来診療報告	10
子ども病院附属障害児学校起工式報告	13
ネパールスタディツアーに参加して	14
ミャンマープロジェクト報告	18
AMDA 本部における研修レポート	20
講演会レポート グラミン銀行	21
フィールド日記	23
国際協力ひろば<ひと>	26
” <地域> AMDA 支援コンサート	27
神奈川支部だより	30
栃木便り	32
AMDA 国際医療情報センター便り	33
寄付者等名簿	38
事務局便り	39

表紙の写真



AMDA ネパール子ども病院開所式

11月2日に AMDA ネパール子ども病院：現地名“Siddhartha Children and Women Hospital”の開所式を開催しました。式には現地住民約2,000人と日本から支援キャンペーンを行って下さった毎日新聞社の方をはじめAMDA子ども病院プロジェクト関係者、スタディツアーメンバー等約30人が出席し、皆で開所を祝いました。

第一次ニカラグア緊急救援活動報告書

<1998.11.26>

看護婦 鳥居 千晃

期間

1998年11月11日～11月21日の10日間。
日本から現地に到着するまで約2日かかる。その他現地調査を除き実際に医療活動ができたのは約3日間であった。

被害状況

10月29日～11月3日 ニカラグア北部・ホンデュラス南部に熱帯性低気圧MITCHによる大雨が一週間続く。同時にカシーヌ山の山崩れも起こり約2,600人ほどが死亡。行方不明者は886人。ニカラグア人口450万人中、被害件数153,833家族、全壊の家21,275件、半壊の家15,093件にものぼる。カシーヌ山のふもとには、まだ多くの死体が埋まっており異臭を放っている。1ヶ月ほどたつ今も処理されていない死体がまだ多くあり、犬や豚のえさになっているというひどい状態である。都市部では被害はみられないが、奥の方に行くに従って、橋という橋は全て壊され、川の中や道なき道を通って進んだ。作物は大部分が枯れてしまっており、以前は家が多く建っており、とうもろこし畑が一面にあったところが全て流され一面の沼地になってしまい流されてきた木の株や石がぼつぼつと横たわっているのみである。1日300円(C\$30)で政府より雇われた人々があちこちで迂回路の造成や、橋の補修工事をしている。

活動内容

チナンデガ県とレオン県の県境に設置されたラビルヘン地区被災民キャンプにて診察を行った。数ヶ所あるキャンプのうちでは最大のものであり最も被害の大きかったチナンデガ県の被災民450名ほどを収容している。その近くに元学校らしき小さなほったて小屋があり、薄汚く暗く、電気や水もない雨漏りのするような所であったが他には何もない為そこを診療所として

医療活動を行った。近くに医療施設はないようで遠くのキャンプから長い時間かけて歩いてくる人もおり、毎日大勢の患者が押し寄せた。とても医者1人看護婦1人ではやりきれず地元の医者3名の協力を得、190名ほどの診察をする事ができた。5時半以降は暗くなってしまい電気もない為毎日押し寄せてく



る全員の患者を診ることができなかった。

主な患者は、気管支炎、インフルエンザ、下痢、精神不安定、パラシトシス(寄生虫疾患)、マイフーシス(皮膚病)などが多くみられた。自分の家、大切なものが全て流され、ある者は家族を亡くし目の前で恐ろしい光景を見続けたであろう。この診療所に来た患者の多くは、食欲低下や不眠、Sexがうまくできなくなったなどと訴えた。悪夢にうなされて、夜よく眠れなかったり、雨が降ると恐怖で泣き出す子供がいるという。実際にこの災害で親を亡くした子どもも多く、山の頂上のゴミ捨て場に住んでいる子どもにも会った。薬を与えれば治る身体的疾患とは程遠い精神的問題は、薬に頼ることができずとても難しいと思



う。慎重に対応し、少しでもその不安や恐怖の軽減ができるよう、時間をかけてゆっくりと耳を傾けてあげる事が必要と思われる。

(主な診療内容・医療活動)

1. 内服・点滴治療
2. 結膜炎予防として、妊婦以外にワロラムフェニコール点眼
3. 精神不安定患者に対しカウンセリング
4. コレラ・赤痢・レプトスピラなどの伝染病予防としてポスター作成し、指導にあたった。
5. 豆・チーズ・小麦粉・砂糖・油などの配給
6. 全員にカロリーメイト、子どもにORS(脱水状態を改善する経口補液)を支給した。

最後に

今回日本からは、渡久地医師と私の2人のみが現地入りした。現地の状態やどのようにプロジェクトを進行していったらよいのかよくわからない私たちにとって、AMDAの調整員として無償で働いて下さった八巻ご夫妻の助けは多大であった。ご夫妻はODM-JCの一員として10年以上ここニカラグアにて東洋医学を普及されている方である。先生は現地の事にとっても詳しく、現地の人達から信頼されておりとても顔のひろい方である。その八巻先生の下、スムーズに更に安価にてこの活動を進める事ができた。

初日に自分達もってきたダンボール5箱の医薬品全てがマナグア空港にて消失してしまった時、帰りのチケットが無くなってしまった時、その他私たちはとてもそそっかしい事が多く、全ての事で大変なご迷惑をおかけした。しかしそんな私たちを見捨てる事なく先生はよく2人の息子さんの話やニカラグアの文化の話をして笑わせて下さった。空港でも見送りしていただき、出発までの1時間以上の間、ロビーで一緒に

待って下さり最後に「楽しかったよ」と言って下さった。八巻先生の様々な視点からの物の考え方、ボランティア精神あふれる優しい人間性にはとても感動した。しかし日本帰国後、八巻先生が疲労で寝込んでしまわれたという一報を聞き、はっきり言って申し訳ない気持ちでいっぱいである。感謝の意と同時に、一日も早いご回復をお祈りしています。また今回、このプロジェクトが始まってから事務所に泊まり込みでこのプロジェクトを陰で支えて下さっている岡崎さん、アフガニスタンプロジェクトでお世話になり今回この活動に参加しないかと声をかけて下さった成澤さん、その他本部の皆様、募金をして下さった方々のお陰でこのような貴重な体験ができ本当に感謝しています。ありがとうございました。

そして今後は、医療活動と同時に復興に向け社会的生活をとり戻せるような長期的な援助が必要と思われる。この災害は阪神大震災の数倍の本当に規模の大きい悲惨なものである。この災害で全てを無くし、恐怖におののく人達、ゴミ捨て場に住む子ども達に対し、何とか少しでもおいしいものが食べられたら、皮膚がかゆくならない清潔な服を着る事ができたらと思った。1人でも多くの方に援助の手を差し伸べていただけたらと思う。

中米ハリケーン緊急救援活動（ニカラグア）

<第二次医療チーム>

医師 ララ・ゴログリー（Laragh Gollogly）

AMDA カナダ支部

翻訳 藤井倭文子

1998年11月18日ニカラグア到着後、我々第二次医療チームは第一次医療チームによって設けられたポソルテガ地区避難所へ直行した。この被災地には約400人が収容され、その約半数はイタリア政府によって準備されたテントで生活しており、他の半分はハリケーン・ミッチ襲撃以前から住んでいた各自の住宅で生活している。この村はレオン県から約20キロ西にあり、主要道路から少し入ったところにある。この道路では大掛かりな橋の再建が行なわれているが、何とか通行可能である。

殆どの住民は農民で一家族あたり平均5人の子どもがいる。村は砂糖きびや大豆畑に囲まれ、大きな牛の群れや数頭の子馬やカンキツ類の木が沢山ある。先在していた半数の家屋は泥流によって破壊されているが、住民の健康状態は村民、被難民を含めて比較的良好である。

栄養状態も良く、災害によるショックも少なく、実際に問題がある場合にはポソルテガやレオンに行ける定期バスが走っている道路にも近い。

ここでは帝王切開や盲腸炎の手術が一番多く行なわれ、ときおり熱湯やミルクによる小児やけどが治療されないまま癩痕ケロイドになりそうなケースも見受けられた。この自然災害で健康への影響が多分に憂慮され過ぎたきらいがある。そういった過度の懸念も時を得た援助がなされれば、そこまで心配しすぎなくてもすんだのではないかと。患者は精神的ショックを受けた

人が多く、外傷者は少ない。亡くなった人は明らかに即死している。

水はトラックによってこの村に搬入され、ユニセフから供給された二つの大きなゴム製の袋で分配されている。長期にわたるこの水の問題の解決策は現在検討中である。食物も救援機関によって配布されているが、通常の食料源の代わりとなるものではなく人の好意によるものと思われる。



現在学校は閉鎖されておりこの村における水難を免れた鍵のかかる唯一の建物なので、診療所はこの保育園で開かれている。この建物は約15平方フィートの広さで、水も電気もなく二つの窓に鉄の網がついている。二つのベッドと、黒い間仕切り、テーブル一台、腰掛け3脚、多数の子供用椅子、一台の長くて低い

テーブルがある。このテーブルの上に医薬品を置いている。ここは施設され村から選ばれた子供が毎日掃除している。この診療所の最大の欠点はぐるりを取り巻く光線の不足である。日中でも懐中電灯で患者の診察をせざるをえない。西側の窓の下のベッドではそれ程でもないが、常にドアの外にいる群衆が窓から中を見るために動きまわるので、患者にとってプライバシーはほとんど無い。

次に考慮しなければいけない点は、この建物はもともと保育園として使用されていたので、再開されなけ

ればいけないし、少なくとも診療所と共用しなければいけない。もしこの建物が常置クリニックとして使用されるならば、改善は比較的簡単で一部保育園として使用されても、両立できうる。もしAMDAがこの村で活動を続けたいなら、参考までに下記事項を提案させていただく。



4 フィート部分の波型の鉄製の屋根の一つを周囲を取り巻く光線を十分利用するために波型のプラスチックに取り替える。内壁を白く塗る。鍵のかかる薬品を入れる収納家具を作るか入手する。それによりクリニックで診療の無い時でもクリニック全体を閉める必要はなくなる。雨水だめタンクを作り正面入口の外側に蛇口を設け、もし必要なら診察前に患者の足を洗う事ができる。窓をおおわなくても患者のプライバシーを維持するために、不用なときは移動できる独立したスクリーン（間仕切り）を作る。東側の壁の外側にそってベンチを置くと待っている人達のために便利である。これら諸々の改善はクリニックの日々の機能を大変楽にする事ができ、その土地の住民の技術や材料を使って簡単にできる。

ここの住民の医療の必要性に関しては、現状では健康状態も良く感染性伝染病でさえなければ、常勤の医師の必要はない。現在問題となっている症状は妊娠可能な年齢の女性の尿管感染、子どもたちに様々な良性皮膚科系の症状や全年代をとおしてウイルス性の喉頭炎である。一番良く求められる薬品は頭痛や一般的な鎮痛剤である。母親たちは度々ビタミン剤やワクチンを要求した。このクリニックでの第二次医療チームの診察期間中には特に重症患者はなく、ほとんどの診察は差し迫った必要からではなく、好奇心によるものだ

と思われた。この点を考慮して、もしこのクリニックが続行されるならば、その焦点を深刻な緊急救援自体より予防医学や保健医療に変える事が賢明かと思われる。

健康な乳児の検診、成長グラフ、胎児期の注意、予防接種や感染予防管理等もこのクリニックで提供できる。歯科衛生は特に必要とされる分野である。全ての子どもたちは虫歯にかかっており、殆どの大人たちも大部分の永久歯をなくしている。これら全ての機能はパートタイムのクリニックとして、例えば毎週2-3日の午前中のオープンで可能である。もし更に供給源（情報・知識等）の提供があるならば、現地住民のためのマラリアの状態や他の感染疾患などの調査も行う事ができる。いずれの調査もまず第一に診断装置、顕微鏡、スライドや遠心機無くしてはその量を定めることは不可能である。

最後に、このAMDAプロジェクトは今日のニカラグアにおける、農村住民に関して大規模な自然災害と効果的に組織化された時を得た援助に関連して学ぶ興味深い機会だと思う。この経験から得た疫学に関するどんな教訓でも確かな資料をもとに実証されるべきである。筆者はここの住民の健康水準はなかり良いので、過度の援助は必要と思わない。将来、特にこのプロジェクトがとる方向に関心を持っている。

ホンジュラス現地からの報告

災害復興状況：首都テグシガルパ

< 11月29日 災害から4週間 >



調整員 関谷 武司 (第3次派遣チーム)

被害のひどかった街の中心部やその隣のコマヤグエラ地区では、表通りはブルドーザーなどで泥の大部分が取り除かれた。ただ、残った泥が乾燥し、すさまじい砂埃が舞いあがっている。歩いていると異臭が漂い、鼻の穴は泥で真っ黒。災害発生からすでに4週間過ぎたが、裏通りにはまだ泥が残ったままで、かつて協力隊員が住んでいた通称日本人アパートの前などは1.5mほども溜まった泥が残されたままで通行不能。阪神大震災のときのようにあちこちで建物が崩壊し、どこから来たのかと思うような大きな木やベシヤンコになった車が転がっている。

壊れた建物の中では、何を探しているのか自分の背丈ほどの泥をかき分けて、何かを袋に詰めている人がちらほら。自分も通った文部省の建物はすべての窓が割れ(前から何枚かは割れてはいた

が)、前の道路はいまだに水に浸かり車も通れない。橋のたもとの大きな木を見上げれば、7、8mの高さの枝までごみが引っ掛かっている。通りすがりの人に声をかけると、「これでも格段に良くなった」と答えてくれた。

乾季にはちょろちょろとしか流れていなかった汚い Cholteca 川が、今は最大水深13mの湖である。河川敷にあったイスラの運動公園はいまだ水に浸かったままで、サッカーゴールの頭だけが覗いている。大統領官邸も異臭とごみさえなければ、湖のほとりに建つ中世ヨーロッパの城といった印象だ。しかし、この巨大な水溜まりの下には一体何人の遺体が腐乱しているのかわからない。不気味な気泡が水面に浮かんでくる。

早くこれを何とかしないと伝染病の巣になるのではないかと危惧されるが、政府はどうして何も手を打たないのだろうか。

かつて、JICAの秘書をしていた友人の家を訪ねてチレという地区へ行くと、橋のたもとで何台もの車が泥に埋もれたままになっていた。治安維持と交通規制のためにやたらと軍人や警察官の姿が目立つ。彼女はエルサルバドルに帰って居なかったが、年老いた母親が壊れた家の隣にいた。顔を見ただけで涙があふれ

た。彼女の今居る家はえぐられた土手から3軒目。彼女の話によると、本当は5軒目なのだが2軒は川に流されてしまった。秘書をしていた娘さんはちょうどハリケーンの来た10月末が出産予定日だったが、出産が早まりコマヤグエラの病院に入院していた。体調が回復して退院した後、その病院は洪水

で壊れてしまったとのことだった。

ここテグシガルパでは今、自衛隊の活動が目立っている。彼らは自衛隊、JICAの職員、それに協力隊員の混合チームで、ホテルアラメダに司令部がある。被害のひどい下町に実働部隊のテントを構えていることもあり、初日にはテントのある公園をぐるりと取り巻いてしまうほど大勢の人が押しかけたらしい。11月26日に私が訪れたときには40人くらいが患者の仕分けをするテント前に座っていた。ホンデュラス人が整然とおしゃべりもせず椅子に並んで座らされている光景は、この国で活動してきた私には極めて奇異に映る。びしっとやればできるのだ。ここで患者は、内科・外科・小児科に分けられるようで、すぐ前に張ら



吉野のい

れた3つのテントへ送られる。ただだ（お金がいない）からと便乗して薬だけを求めてきた者は、こちらへは入れてもらえない。

今回の各国の緊急援助について現地人の評価が最も高かったのはメキシコが行った災害直後の大掛かりな中心部の泥の排除だった。もちろん他の地区ではまた違う評価があるであろうが、メキシコの対応の速さとの確さが好評を得たようだ。金額的にも人的にも比較にならないほどの大きな援助を行ったアメリカに対しては意外なほど評価する声は少なかった。日ごろからの対米感情がそうさせるのかもしれない。日本はさらに遅い対応であったが、前述のように自衛隊の医療活動は評価が高い。そして、日本では知られていないが、災害直後に日本大使が即決し

た南部地方への幹線道路の復旧支援は非常に喜ばれている。首都へのガソリンや食料品の供給がこの幹線道路に大きく依存していたため、災害直後たいへんな混乱があったようだ。わずかな援助額であったと聞いているが、緊急援助はそのタイミングと支援的的確さがすべてであることを示す好例であろう。

今回の災害における日本の緊急援助を振り返ると、初めての自衛隊の海外派遣、現地で活動していた協力隊員のフレキシブルな活躍、民間NGOの自在な取り組みなど、これまで顔がみえないと批判されてきた日本の国際協力活動の中で、日本人がよく見える支援活動だったのではないだろうか。世界では次から次へと問題が起こり、中米のハリケーン災害もすぐに過去のものとして人々の意識の中から消されて行くだろ



うが、2000年までこの国の農業は回復できない状況にあり、今後も回復に向けた支援を続けなければ国家存亡の危機を乗り越えることは難しいだろう。

テグシガルパが一望できるピカチョ山の展望台から見下ろすと、川幅が以前の3倍にもなったことが目を引くが、電気の配信が回復した今、ここの夜景は以前の美しさを取り戻している。この国の経済状態もこのようにすみやかに回復すればいいのだが。

AMDA ネパール子ども病院オープンの報告

◇ 医師 連 利 博

プトワールの街を抜けて、貧しい村を通り過ぎた後、突然暗闇の中から所々明かりのついた病院が幻想的に眼前に現れた。近代的で、芸術的で、不思議に周囲との違和感もなく AMDA ネパール子ども病院はたっていた。まだ設計図でしか見たことのない病院、床面積1000m²と決めたのは、集めた金額からはじき出したとはいえ小さすぎなかったのかなどよくよと考えていたが、この瞬間にすべて吹っ飛んでしまった。院内を案内してくれたDr. Pokharelは本当に楽し

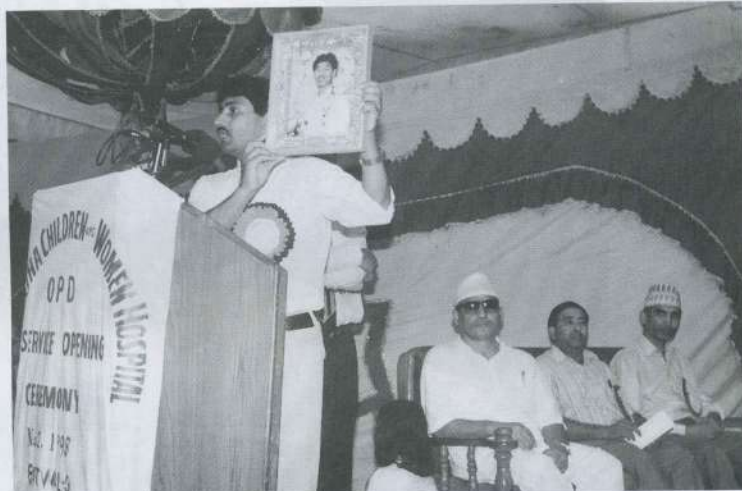
そうであった。NGO 国際ボランティア活動を始めて3年目、異文化・言語の壁を乗り越え一つの事を達成したときの喜びを初めて噛みしめた一瞬であった。

1998年11月2日のAMDA ネパールの子どもの病院の開所式に先立ち、私は去年に引き続きカトマンズのキャンティ小児病院で数日間手術指導を行った後、10月29日に病院のオープンに向け最後の準備を手伝おうと、私と共に薬剤師や看護婦がプトワールに移動した。翌日からこの村を通るとバサバサの髪で裸足で身なりは貧しいが、楽しそうに走り回っている子ども達がまわりついてくるようになり、やがて手をつなぎ、何人かの名前も覚えた。5才までに10人に1人は死んでいくのだから、すでにその洗礼を受けた子ども達なのであろうか。

11月2日の開所式で私は次のようなスピーチをした。「4日前に夕闇の中にこの病院をみたとき、幻想的で夢のなかにいるようであった。実際、5年前は夢であったのだ。2年前のプトワール市関係者との会合では、私はDr. Pokharelには小児外科を教えたが、Dr.

Pokharelは私に強い意志と情熱があればどんな夢でも実現させることを教えてくれたと挨拶したのだが、今振り返ってみれば、その時の私はあまりにもナイーブであったように思う。その後幾多の問題を乗り越えてきたことか。この夢は決して容易なものではなかった。この問題解決への努力の原動力は何だったのだろうか？それは日本人とネパール人との間の人間の絆である。すなわち、毎日新聞読者のドナー1人1人の思いがこもったスポンサーシップの上に成り立つ

AMDA-JapanとAMDA-Nepalのパートナーシップであり、私とDr. Pokharelとの間のフレンドシップなのである。建物だけ立派であっても医療のレベルが立派でなければ何の意味もなさないであろう。私たちは医療レベルを向上させるべく頑張りますので、どうぞ、皆様も今後5年間で自



開所式では篠原基金の紹介も行われた

立できるよう頑張ってください。」

このAMDA ネパール子ども病院建設計画にはいろんな人が関わった。特筆すべきは世界の建築家安藤忠雄氏がボランティアで設計を担当して下さったこともさることながら、毎日新聞社会事業団によって行われた募金活動である。毎日新聞社の飢餓、貧困、難民救済キャンペーンを20年続けたなかでの「報道だけでよいのだろうか」という新聞記者自身のなかの意識改革と一挙に3千万円また後になって1600万円の追加という金額がアジアの援助に集まったということである。このことはとくに阪神大震災という未曾有の経験があったからこそであるらしい。努力があれば運もついてくるものである。さらに、その後11月16日に

毎日新聞大阪本社で大口寄付をして下さった松下電器産業労働組合さんや大阪ガスさんの出席のもと病院完成の報告会が行われ、私も出席した。このプロジェクトに関わった毎日新聞社阪神支局の藤原さんたちのグループが「坂田記念ジャーナリズム賞」を受賞され、その副賞100万円をそっくりそのままAMDAに寄付していただいた。AMDAネパール子ども病院附属のAMDA国際ボランティアセンターの2階部分が資金不足のため未完成でありこれに使うようにとの指定である。今回子ども病院建設・運営計画が成功したかどうかは、5年後に問われる。まずAMDAネパール子ども病院は自立していなければならない。プトワール市や商工会議所の貯金の利子などの援助では不足するであろう。さらに保険のようなシステムを院長のDr. Pokharelは考えている。我々も一緒になって知恵をしばってあげなければならない。

医療の質を向上させ維持するという重要な役割はこれからの私たちのチャレンジである。ネパールの看護学はまだ未熟である。以前にJICAでネパールの看護を研究された富田万里子さんが今度日本でリタイアされ、第二の人生を婦長としてこの病院の小児看護の確立にけることとなった。将来ネパールに小児看護学が確立したとしたら、「日本式看護学がプトワールから」と言われるようにになりたい。私の専門である小児外科も高いレベルで維持したい。

曾野綾子さんの言葉「生きがいのために自分の人生と激しくかかわっていきたい。」という言葉をあためて肝に銘じる次第である。



開所式に集まった人々



AMDAネパール子ども病院外観



明るい待合室

AMDA ネパール子ども病院報告

ネパール子ども病院における外来診療内容に関して

◇
内科医師 高橋 哲也



毎日新聞提供

去る11月2日開院式典が盛大に行われた。その翌日より外来診療のみ開始されている。今回は開院より1ヶ月間の外来診療における集計を行い報告する。

外来は現在3診 小児科外来 Dr. Rameshwar Pokharel、小児科外来高橋哲也の体制である。小児科に関しては今の段階では外科、内科をあまり分離せず診療を行っている。Dr. Rameshwar Pokharelはその日の患者数や、高橋と Dr. Binod Parasuli のコンサルトに合わせて院長業務を速やかに中断し診療に参加する形式をとっている。産科・婦人科に関しては Dr. Binod Parasuli が担当しているが研修医としての立場でもあり、いつから婦人科的な専門の診察が始まるかまだ今後の課題である。

受診者数であるが1ヶ月の間に延べ1377例、うち新患者数は1211例であった。受診日で割ると一日当たりの受診者数は小児科40.7例、婦人科19.2例の計59.9例である。小児科の性別では男児519例、女児416例と男児が多く受診する傾向がみられた。この傾向はネパールのどの医療機関でも共通に認める傾向で男児ほど大切にするという家族の気持ちの表れであると言われている。

ここからは高橋が1ヶ月間に診察した小児例529例のみを対象に集計した。グラフ(P12)が示す通り受診者数の年齢分布では年齢が低い程受診者数が多い傾向にある。病院のポリシーのひとつである地域の乳幼

児死亡率の改善という意味からも今後期待が持てる傾向である。

次に疾患別の表を示す。529例のうち初診患者498例のみを対象に集計している。疾患分類としては呼吸器疾患がもっとも多い。これはいわゆる感冒を呼吸器疾患に含めるために見かけ上多くなっている。次に消化器疾患が多い。これは下痢を主訴に受診する患者が多いためである。この時期は比較的下痢が少ない方であるがそれでも受診者の4分の1を占める。細菌学的な診断はまだ十分に行われていないが、起因菌としてランブル鞭毛虫が多いと言われている。更に皮膚科的、耳鼻科的な疾患が目立つ。皮膚では疥癬が多い。手や足だけでなくほぼ全身に広がった例が多く、ときには細菌感染を起こし広い範囲に膿化疹を形成している。家庭の衛生状況に由来するためと考えられる。耳鼻では中耳炎、外耳道炎、耳垢閉塞が主である。これらが多い理由は耳垢を取る習慣に乏しく外耳道を不潔にしている子どもが多いことによる。耳垢で閉塞した外耳道から膿が流れ出してから受診する患者が後を断たない。経過の長い患者は鼓膜がすでに搬痕のみとなっている例も少なくなく、中枢神経系の発達という意味でも将来が心配される。

入院適応の患者や歯科治療が必要な患者に関しては、現在同じブトワール市内にある総合病院に紹介している。ここも医師不足が問題となっているがさしあたり必要な科は揃っている。また国の休日と病院の休日を重ならないようにしているため互いの病院を職員が訪ねやすく現在よい協力関係を保っている。

ネパールに来る前から聞いてはいたことだが感染症の多さにはやはり驚いている。臨床診断での集計であるが91%が感染症であった。また診療の中で多くの子供に接していると体重の少ない子どもが多い事に気付く。診察患者数もそろそろ1000人近くなるがまだ一人も肥満児を見ていない。清潔な服を着て病院に来



診察中の筆者



待合い室



身体検査をするボカレル医師



日本とネパール合同の看護婦さんたち



検査室



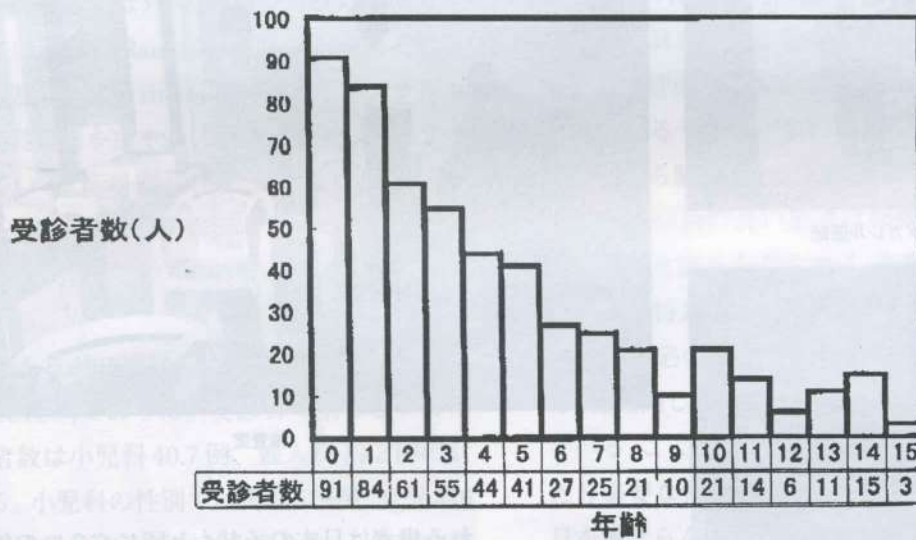
階段でなくスロープになっている

れる患者は日本の子どもと同じぐらいの体重があるので人種の差ではなく、環境要因が主であると考えられる。現在看護婦が受診者全例に対し身長、体重、体温、脈拍の記録を行っているので、いずれ受診患者全体としてのデータが揃う予定である。

今後病院では2月を目標に入院患者の受入れを開始し、その後順次手術、時間外救急、分娩と仕事の範囲を増やして行く予定である。

疾患分類 (例)	疾患名 (例)	疾患分類 (例)	疾患名 (例)
呼吸器 171	上気道炎 88	整形外科 6	
	気管支炎 65		歯科 8
	気管支喘息 10		眼 4
	肺炎 7		泌尿器 3
	肺結核 1		循環 2
消化器 129	胃腸炎 122	検診目的 2	
	便秘 4	その他 63	リンパ節炎 13
	急性肝炎 3		水疱瘡 2
皮膚 70	皮膚炎 33		風疹 2
	疥癬 26		不明熱 7
	皮下膿瘍 11		その他 39
耳鼻 40	外耳道炎 22		
	中耳炎 5		
	耳垢閉塞 3		
	扁桃炎 10		
		計 498	

小児科受診者年齢分布



最後になりますが現地ではマンパワー不足がもっとも問題となっています。職種や経験、短期長期を問わず多くの日本人に現地を訪れていただき、一緒にボランティアをしたいと思います。多くを準備する必要はありません、気持ちも荷物も身軽にして来て下さ

い。そして肩肘張って支援する事のみならず、一時的に日常生活を離れてみて医療とは何か、日本、家族、自分自身とは何かなど普段近すぎて見えない何かを自分なりに見つめるいい機会にさせていただきたいと思います。

AMDA ネパール子ども病院附属障害児学校起工式

ネパール子ども病院開所式に引き続き、病院に併設する障害児学校の起工式を行いました。起工式には、ブトワールの障害児学校の生徒たちも出席してくれ、菅波代表らと共に式典に加わってくれました。「障害児学校建設プロジェクト」にはAMDA高校生会が募金活動等一年にわたって支援してきました。そして、今回、起工式を前にして、ブトワールの皆さんへのメッセージを菅波代表に託しました。



AMDA 高校生会のメンバー



「ネパール子ども病院附属障害児学校」起工式

AMDA 高校生会からブトワール市民の皆様へ

ナマステ

私たち AMDA 高校生会は、いよいよネパール子ども病院が活動を始めることになったことを聞き、ネパールで苦しんでいる人々が少しでも助かるという大きな喜びとブトワール市の大きな発展という新しい希望を感じています。

AMDA 高校生会は AMDA でボランティア活動に取り組んでいる 25 名の高校生の集まりです。週に二回 AMDA 本部にて活動をしています。一昨年より本格的な活動に取り組みははじめました。中国や旧ユーゴスラビアプロジェクトの勉強会や現地訪問を通じて集めた情報をもとに支援活動の計画を立てました。一昨年は、大震災のあった中国での学校再建プロジェクトに参加し、被災地に小学校を完成することが出来ました。

昨年からは、ネパールの未来を担う子ども達を助けたいという思いで、活動を始めました。夏休みを利用して、AMDA 高校生会から数名がネパールを訪問し、そこで、明るく元気なネパールの子どもの達との出会いました。また、障害者でありながら決して希望を捨てない子どもの力強さに圧倒されました。ネパール子ども病院の敷地内に、できるだけ早い障害児学校建設の必要を感じ、「ネパール子ども病院附属障害児学校建設プロジェクト」を支援することを決めました。

そこで、私たち学生でも小さな活動から AMDA のプロジェクトに参加できるということを知りました。その具体的な内容としては、郵便による募金の呼びかけ、商店街バザーや大きなイベントへの参加、インターネットでの協力の呼びかけなどいろいろな事をやってきました。しかし、AMDA 高校生会の力だけではなかなか大きなお金を集めることが難しいことも痛感しました。でも、小さな一歩でも始めれば、少しずつ協力してくれる人々が出てくることも分かりました。全体の 2/3 以上の ¥2,629,324 が集まった現在、ついに、工事のめどがたち、11月2日に起工式がとり行われることになりました。ぜひ、ブトワールに行って式に参加したいのですが、残念ながら時期的に無理なので私たちの手紙を AMDA 代表菅波茂先生に託します。

私たちはこれからも、世界の人々の心の中に小さくても良いから、灯をともししていきたいと思えます。そして、その灯を大きくし、さらに大きな松明にして、世界の人々の心の中に広げていきたいと思えます。この大きな灯が多くの人達の笑顔を取り戻す力になると確信しています。このような活動に参加できて良かったと心から喜んでます。

これからも私たちは、皆様と力をあわせて、一日も早くネパール障害児学校が開校ができますよう、がんばります。

1998年11月2日

AMDA 高校生会一同

悠久の自然と現実

藤元 節 (東京都在住)

「高校時代の恩師が、ネパールで、いい仕事をして
いるはずなんですがね。知ってます?」。ネパールを
訪ねたことを話すと、毎日新聞社の幹部である後輩に
問い返された。彼は、神奈川・栄光学園の出身。ある
いはと思い、「大木神父なら、お会いしてきたけど」と
答えた。彼は目を見張った。AMDAツアーがもたらした、この偶然は、ネパールが遠くて、近い国の証拠で
はないだろうか。

私がツアーに参加したのは、早
々と雲の上に行ってしまった先輩
記者から、ヒマラヤの素晴らしさを
聞かされていたのに加えて、今
回の子ども病院建設の募金運動に
たずさわったから。豊かとは言え
ないふところをはたいて旅費を調
達し、カトマンズに着いた途端、
この国の現実を知らされた。空港
から迎えるマイクロバスに向かう
途中、自らの意志に反して、ネパ
ールの少年たちのグループに、ド
ル紙幣のすべてを施す羽目になっ
てしまったのである。ショールダ

ーのポケットから、現金だけ抜く鮮やかな手口。「旅
行中、困ったことが起きたら連絡を」と記された立て
札の連絡先電話番号を削り取ったのも、スリ君の仕業
なのだろうか。

貧しい草ぶきやトタンの屋根を石でおさえただけの
家々の向こうに、輝くばかりの子ども病院の建物を目
にしたときの感激は、何と表現したらいいか。オープ
ニングセレモニーで、延々、二十人近くが熱弁をふる
う場面に出くわしたのも初体験。最前列に、はだしで
座って、目をキラキラさせる子どもたち、式場のテン
トからあふれて、木の上の特等席を確保した人……地
域を挙げてのお祭り騒ぎに何度か目頭をおさえた。

関空からロイヤルネパール航空機に乗り込み、関空
に降り着くまで、飛行機がダイヤ通りに飛んだこと

は、一度もなかった。

「ちょっと」と言えば、一時間を意味する場合も、
一日、一週間、あるいは一カ月の場合もあります。遅
れるという意味では同じですから、適宜催促しながら
待つほかありません」。子ども病院の看護婦さんのリ
ーダー、富田万里子さんは、そう笑い飛ばした。こ
のような風土のなかで、募金運動のスタートから二年
余りで、病院の落成十診療開始にこぎつけたのであ

る。菅波茂代表をはじめAMDA本
部及びネパール支部のみなさんに
感謝したい。

歩行中は動物たちの落とし物に
注意しないとえらいことになる。
「ガイド、ガイド」と、まとわって
アルバイトの口を求めてくる子ど
もたちに、困惑もした。それなの
に、一週間の滞在で待つことにす
っかり慣れ、細かなことは考えな
くなくなってしまった。大局を見るこ
とを忘れる欠陥を指摘されたよう
な気さえた。

一人当たりのGDP (国内総生
産) が、日本の四百万円に対し、わずか二百ドルとい
う貧しい国だが、朝市・夕市に出回る野菜は野趣に富
み、食卓にのるためにかごの中で待つ鶏たちも、元氣
そのもの。人々は、いかにも心豊かな様子である。「お
金では買えない何
かがあるのでは?」。妙なものを口にした報いを受け
て、シクシク痛むおなかをおさえながら、何度か考え
込んだ。

日程に、ちょっとハードかな? と思う面もあった
が、大木神父の実践をはじめ、いくつかのNGOの現
場を訪ねることができたのは、大きな収穫だった。そ
して、一番幸せだったのは、ツアーの仲間のみなさん
に恵まれたこと。機会を見つけて、もう一度、ネパ
ールを訪ねたい。



大木神父に記念撮影をお願いした。左が筆者、右は邦
楽演奏の黒住さん(ボカラの障害児センターの庭で)

ネパール紀行

◇
桐山 隆山 (岡山県在住)

私たちが、ネパールのプトワールに建てられる、子ども病院の開所式に参加することを決めたのは、今年の5月末のことでした。

5月25日、東京在住の中国人音楽家、二胡の姜 建葦、琵琶の楊 宝元両氏を迎えて、岡山の、尺八、箏、リコーダー、詩吟の人達と「AMDA中国プロジェクト支援コンサート」を、岡山市民文化ホールで開催しました。

会場は、AMDA支援の方々や、邦楽、リコーダー、詩吟の愛好者らで、800席は満員となり、この会のために、中国短大の「松井みさ」さんに作曲していただいた「連星」～二つの独奏楽器とアンサンブルのために～と題された、二胡、琵琶と、尺八、箏、リコーダー、ボーカルという世界で初めての組合せによる曲も演奏され、成功裡に演奏会は終了しました。

この演奏会のことでAMDA事務所に何回か足を運びましたが、その際、AMDAネパール子ども病院の開所式にAMDAから参加することを聞き、又、チラシも見せていただきました。演奏会の収益金をAMDAに寄贈させていただきましたが、そのとき菅波代表から改めてネパール行きのことを持ち出され「行こうか」ということになりました。

最初に書いた「私たち」というのは、尺八・桐山隆山、箏・根津章侖、三絃・山本章敦、鼓・望月多津友、リコーダー・延藤稔、ボーカル・河田葛泉、玉島テレビ・白神康文、アシストとして瀬戸町万富の水田浩人の8名で「AMDAネパール子ども病院オープニング参加代表団」に加わることになりました。

11月1日、関西空港からカトマンズ行きのロイヤルネパールの航空機による直行便は、1時間遅れで離陸、途中上海での給油もタイヤがパンクしたのを修理する作業も加わって、カトマンズに到着したのは予定時間を相当過ぎていました。

その後、飛行機にしても会合にしても遅れるのが当たり前で、日本人は時間に厳重すぎるのが判り、ネパールに居る間、時間の遅れが気にならなくなりまし

た。

11月2日、カトマンズから空路パイワラへ。離陸するとすぐ右側にヒマラヤの雪をかぶった山々が見えだしました。40分でパイワラ到着。音楽グループの女性4名はホテルで着物に着替えて、マイクロバスでプトワールへ。道路の両側は大きい木の並木路になっており、田圃には稲が実っていたり、刈り取られていたり、日本の農村風景というところですが、家は赤レンガ造りや草屋根のほったての家であるのがネパールという感じでした。稲は二毛作で、今が刈り入れ時とのことでした。

ネパールはヒンズー教の人が9割位で、牛は殺しても食べても駄目ということで道路をゆうゆうと歩いたり、寝そべっていたりで、車の方がよけて通っていて、いかにものんびりとしているように見受けられました。

子ども病院の入口の赤や黄色で飾られた門をくぐって中に入ると、赤レンガの大きな病院があり、その前の広場には天幕の大きな屋根の中に開所式用の舞台が作られていて、カーペットの上や椅子、そして立っている人、大人と子供1,000～2,000人位が集まっています。

開所式の主賓である「厚生副大臣」の来院は飛行機が遅れているので、先に邦楽の演奏をして下さいとのことで、私と延藤さんは急いで着物に着替えて舞台へ。

ここには岡山のAMDA事務所でいつも顔を合わす、ネパールの医師ニルマル先生がいて、ネパール語と日本語で司会役です。

私たちの演奏は、まず、ネパール国歌、日本国歌、そして「北海民謡調」「元禄花見踊」最後にネパールの民謡「RESHAM FIRIRI」を演奏しました。大きな拍子と「アンコール」の声もあったので、再度「レッスン フィリリ」そして、踊って下さいと言うと、4～5人の方が唄に合わせて踊り、全員の手拍子で会場は楽しい雰囲気に包まれ演奏を終えることができました



た。

日本と同じ位の気温のつもりで行ったのですが、9月中旬位の気温です。男性は汗になった着物を脱いだのですが、女性は着物のままです。するときれいなサリーを

着た地元の女性や子どもが着物のところに集まって来て、写真を撮ったり、話をしたりで、まさにアイドル的存在になっていました。

予定より2時間位遅れて厚生副大臣が到着され開所式が始まりました。

菅波代表や日本人の医師、看護婦さんの達のあいさつや紹介、そして地元の人達の祝辞等が続いていましたが、ネパール語なのでさっぱり判りません。

私たちは、病院の中や外で地元の人達やグルカ兵達と片言の英語や手振り身振りで話をしたり、一緒に写真を撮ったりしていました。

式典は大幅に遅れて、記念植樹は電池やローソクの火を照らしながら行われ、ようやく終了しました。

病院は「SIDDARTHA CHILDREN & WOMEN HOSPITAL」が正式な名前で、三方が山に囲まれ、南はインドまで続いているであろう平野が見渡せる閑静なところにどっしりと建てられています。

式典終了後プトワール市内で歓迎会へ招待され、地元の小中学生による民族舞踊をビールとつまみを食べながら鑑賞しました。ビールはフィリピン製の「サンミゲロ」でとてもおいしく、ネパールにいる間中「サンミゲロ」と地酒（焼酎の度のきつい酒）のお世話になりました。



11月3日、菅波代表は、子ども病院で初診療をしてから帰国。私たちは、ルンビニのお釈迦様生誕地を観光してから、バスに8時間揺られて登山墓地の町ポカラへ。

11月4日、小高いサランコットの山頂から、アンナプルナ山群とマチャプチャレを見ながらの日の出。雲一つないネパール晴の中、神々の山々をバックに「春の海」「さくら」「荒城の月」そして地元のサポーター達との「レッスン フィリリ」。

ヒマラヤをバックにした尺八、箏の演奏はまさに感激！感激！

その後カトマンズでのマザーテレサの作った施設の見学と演奏、そして世界遺産になっている目玉寺の見学。更に、多分一生私の目の底から消えることがないであろう遊覧飛行でのエベレストを初めとする「神々の山々」の眺望。

そして親しみにあふれたネパールの人々。「衣食足りて礼節を知る」論語の言葉も当を得ていないような気がします。

短いネパールであったが、いろんなことを見、聞き、学んできました。「これからも頑張るぞ」邦楽の演奏、ボランティアで行きます。声をかけてやって下さい。

私も何かをしなくては！

◇
水田 浩人（岡山県在住）

AMDAのネパール・スタディツアーは、私にたいへん大きな影響を与えてくれました。今、私はたいへん忙しいことをしておりますが、来年早々にも落ち着きましたら、AMDAの活動のお手伝いを本気でしなくてはいけないと思っております。

貧しい百姓の子どもとして育った私が、ネパールの農村で見たものは、まさの私が子どもであった頃の半世紀以上も昔の姿でした。裸足で暮らす汚れた服の子ども達、それは50～60年前の私の姿そのものを見るように思われて、たまらなく悲しくなりました。

私は今、車やテレビ・パソコンなど様々な家電製品に囲まれて、豊かに文化的に暮らしています。そして、太りすぎを気にするほどの飽食で、まさに幸せいっぱいです。

しかし、先年訪れた中国どころではない貧しい人々の群を、ネパールでは見せつけられて、忘れていたことを思い出されました。何かしなくてはならない。私にできる何かをしなくてはならない、そうした気持ちが湧き出てくるのを強く感じました。

日本でも私の周りには、困っている人、辛い思いをしている人が沢山おられます。私は、そうした人々のために残りの人生を捧げたいと、今、頑張っています。しかしもっと私の活動の場を広げて、AMDAのように民間の国際貢献をしなくてはいけないことを、今回、思い知らされました。

幸いに、私は以前から国際交流に関心があり、少し前から英会話と中国語を勉強し始めています。今回のツアーでも私の下手な英会話も少しは役に立って、ネパリ（＝ネパール語のネパール人）達といろいろな交流をすることができました。

少しだけでも英会話ができると、買い物の交渉上手（値切り上手）ではありません。邦楽グループの『大道芸』でのお金集めで、「ブリーズ・ボイサ」と言っていて、子ども病院への寄付を説明しながら、130ルピー（1ルピー＝2円）をあの貧しいネパリ達から頂きました。また帰ってからメモを整理してみますと、10



人々の住所メモを貰っていました。サランコットの山頂やホテルのサヨナラ・パーティーなどでの邦楽演奏への人集めと『レッサン・フィリリ』の曲に合わせて、「踊って、踊って」とネパリ達を踊らせもしました。

私の出会ったネパリ達は穏やかで気持ちの優しい人達でした。そういう人達との交流がたくさんできたことも大きな成果でした。

忙しさが一段落しましたら、あの優しい人々の写真を送ってあげて、そこから新しいお付き合いも進めていけるのではないかと考えています。そして、インターネットやEメールも近々開設したいと思っておりますので、いろいろな情報を周りの人々に伝えて、国際援助活動のお手伝いができればこの上ないと、夢を膨らませております。

今回のAMDA・ネパール・ツアーは、ほんとうに私を強く刺激し、私の活動のエネルギーを更に大きくしてくれるものでした。多くの方々のご指導を賜りながら、私にできることを少しずつ広げて行きたいと思っておりますので、皆様、どうぞよろしくお願いたします。お連れ下さった菅波先生、AMDA事務局の田代さんやツアーの仲間の皆さん、そして桐山先生を中心とする岡山からの邦楽グループの皆さん、ツアーコンダクターの長谷川さん、皆さんの暖かいお付き合いに深く感謝いたします。

また今回、小学校の同級生に52年振りに再会でき、ツアーを共にすることができ、新しいお付き合いを始めることもできました。本当に世の中って不思議なものです。良い事をすれば良い事が付いて回るのです。

夢と希望、そして新しい出会いを有り難うAMDAさん！今、AMDAは私のものになりつつあります。

ミャンマープロジェクト報告

「子ども病院、これからが本番です」

AMDAMyanmar 駐在代表

大森 佳世

11月20日、キラキラに輝く太陽の下、AMDAMyanmar 子ども病院の起工式を行いました。今後のミャンマープロジェクトの核となる事業の記念すべきスタートです。その前の18日、大使館で草の根無償資金の調印式が行われました。この模様はサンケイ新聞11月19日付け記事で、「ヤンゴン発」で載っています。この報道関係者を入国させるのが困難な国に、何とか許可を取って、3人の記者とカメラマンが取材に来て下さいました。ヤンゴン発のニュースなんて、少し画期的です。ODAがストップしているミャンマーでは、NGOによる草の根の活動を通しての国際支援が、一つの大きな役割を果たしています。朝海大使から、「国民レベルの人と人のつながりができる活動になることを期待している。」と激励されました。



起工式風景

起工式のエンターテイメントのために、YMCAの替え歌で、AMDAMという曲を作りました。ミャンマー語と日本語のミックスです。「ヤングメェーン」ではなくて「ミャンマァー、さあ建て出そうよ」、「YMCA」ではなくて「AMDAM AMDAM、病気などおふき飛ばしてえ、子どもは元気出そおー」「健康ならあやりたいことお、何でもできるのさあー」という感じです。ミャンマー語部分は、この国でも有名な作詞家に、「誰が聞いても喜ぶような内容に」作っていただきました。そして歌は、今売れている美人の歌手にお願いしました。日本語部分は私が担当です。そして停電のため、電気がある深夜にスタジオイン。ヘッドホンをつけて、「キュー。」っとレコーディングを行いました。先生はとても厳しく、風邪気味の私の都合などお構い

なし。「はい、やり直し。」「はい、もう一回。」と3時間にも及ぶレコーディングで、連日の睡眠不足もたたって声も出ず、もうしんどくなって、歌手はこれっきりで辞めようと心に誓いました。

起工式前日、我々25人のAMDAMyanmar チームは、多くのゲストを迎え入れて式の準備を整えた後、深夜までテーマソングと振り付けの猛特訓を行いました。ここで2年近く医療活動を行ってこられた吉岡医師も踊ります。はいPHCチーム、はいモバイルチーム、はいヤンゴンチーム、はいオールドメンチーム、はいヤングメンチームといった具合に、汗ビショビショになって歌と振りの練習をしました。ヤングメンチームはそれぞれA、M、D、A、をプリントしたTシャツを着て望みま

した。そして先日帰国された桑田医師の、「ミャンマーとみんなは、私にとって本当にタンヨーゼン（大切なもの）」というメッセージをスタッフたちに伝え、「明日はがんばろおお！！」と解散しました。

起工式当日、厳粛な雰囲気です式典が取り行なわれました。ミャンマー側からは知事や市長、保健省関係者など、日本からは大使館、JICAからも関係者が列席して下さり、総勢100名にも及ぶ人々が、メッティラディストリクト病院に集まりました。これまでのAMDAMyanmarの当地での活動を基盤として、誰もがこのプロジェクトに期待を寄せています。ただ単に建物を建てて引き渡すだけではなく、これまで直すことができなかった難しい病気にも対応できる高度医療施設を備

えるために、医師や看護婦などの医療スタッフの日本とミャンマーの交換プログラム、さらには経済的理由によって病院にアクセスできない人々のための経済支援プログラムなど、ソフト面での整備も含まれているからです。病棟が建つ最も基礎となる場所に、この国の風習に従って各生まれ曜日の代表者が石を置き、建築が無事に進むことを願いました。

AMDA チームの出し物が始まると、本部から来た小池総務部長までがステージにのぼって来て、一緒に歌い始めました。興奮の渦の中、終わってみると観客席から軍人がステージに上がってきて、「もう1回。」とアンコールを求めてきました。我々もそれに応えてもう一度。式後のパーティーでも政府関係者から何度も握手を求められ、「お金は心配いらないから、このレコードを販売したらどうだ。」と、小池総務部長に命じました。そして「エアフォースワンという映画を作るから、それにみんなで出ないかあ。」とAMDAはスカウトまでされてしまいました。

スタッフはみんな、毎日早朝から深夜まで睡眠不足でありながらも、自分の受け持ちを、楽しく、生き活きと、疲れるところを知らない勢いでこなし、自ら提案もするようになりました。起工式、パーティーの後、クタクタになってオフィスに戻っても、またみんなでごり惜しんでギターによって輪になって歌うという感じで、体の疲れも全く気になりませんでした。サンケイ新聞の方たちも楽しんでおられたように思います。みんなのこんな姿を見たのは初めてでした。



起工式を皮切りに、今、母子保健促進5ヶ年計画のハードの部分が、始まったばかりです。いろんな要因で挫折したり、くじけそうになったら、今の感動を思い出して、AMDA ミャンマーの活動を支えて下さる多くの方々の熱い思いを胸に、一つずつ乗り越えていきたいと思います。AMDA ミャンマーの活動は、サンケイ新聞が平成11年1月1日から7日連続で掲載し、また起工式の模様は特集で、お伝えする予定です。ミャンマーでも国内委員会を作って、募金を集めたり、この事業を進行・監視していきますが、日本でもAMDA本部に事務局を置く日本国内委員会に、多くの方々からご支援いただいております。来年度は、スタディーツアーもする予定です。どうぞ皆様、これからも、熱いご支援をよろしく願います。皆さん一人一人の力が、ミャンマーの子どもたちに伝わっていくことでしょう。

AMDA 本部における研修レポート

1998年11月24-26日



ジェイムス・サング (Mr. James Sang)

ケニヤ厚生省, アフリカ

翻訳 藤井倭文子

今回のプログラムから習得した事:

プログラムの第一日目はAMDAに関する管理組織について概要を理解する機会を得た。種々の管理部門と職員(担当者)について知ることが出来た。各部門の様々な機能は保健医療に於けるAMDAの関与する範囲及びその進展についてよく表している。

AMDAの歴史的背景とその後の活力は人類のニーズに対する敏感な反応を示している。

一個人及び大きな目的を持った個人の集団の順応性ある考えが大きな組織に成長した。この組織によって生まれたネットワークとプロジェクトは多くの恵まれない開発途上国の人々にとって大きな希望である。

最も興味を起こさせる点はAMDAが一定のプロジェクトに関し個人、企業、及び他の機関からその資源を機動させる事が出来るかである。しかし、継続的な各機関からの支援は多分にAMDAが着手したプロジェクトの成功にある。他のNGOや政府とのネットワーキング(情報交換)は筆者が研修期間中に気がついた成功への重要なキーワードである。

プロジェクト現場でのプロジェクトの進展に対する取り組み方は非常に大切だという事も学んだ。又、プロジェクト自体の企画、実行、財源問題等に受益者を参加させるという基本的な概念がプロジェクトの成功と継続を確実なものにしている。プロジェクトに対する責任感及び所有者であるという意識も成功への重要な要素である。

AMDAの情報網及びボランティア活動を彼等のプロジェクトへ取り入れる技術と手段には最も勇気をあたえられる。ボランティアの人々によって示されている献身的な行為は大惨事(例えば、自然災害や人災等)において大いに望まれる人間の本質的な特性である。これは異なった国々で様々な人種間での理解を深め、生活をより豊かにする。

一加茂川町での地方における保健設備(高齢者用設備及びコミュニティ診療所)は民間保健医療に関して興味深い体験だった。保健医療に関する状況は日本独特なものであり、そのアプローチ(取り組み方)は筆者の国でも適用できる。また、アスカ国際クリニックの様な民間クリニックがコミュニティ・プロジェクトを運営している事は素晴らしい事だと思う。

プロジェクトをより成功させるためには、受益者がそのシステムを支援する事が大切だ。コミュニティ保健施設のサービスに対し人々が進んで支払いをするという事はそのサービスを維持する上に大切で、彼等の反応と彼等自身の健康に対する責任感を表している。

プログラムに関する印象:

プログラムは大変印象的だった。保健医療に関する管理と運営面においてふさわしいパッケージだった。NGO活動は大部分が成功のモデル・ケースだ。ここでの研修は短期間だったがプログラムのアプローチ及び構成要素は大変すばらしかった。各プログラム・マネージャーから特に自然災害及び人災を体験した様々な国での緊急救援における保健医療に関する運営面において紹介された。

このプログラムによって取得した経験は将来同じ様なプロジェクトを効果的に管理する上で筆者の能力を高めるために役立つと思う。

最後に、筆者のAMDAにおける研修プログラムの成功に関しご尽力くださった菅波代表をはじめ、岡安氏、パンチョ医師、三宅医師とAMDA本部で活躍されているスタッフの皆様心から感謝している。AMDAの末長い繁栄とAMDAが提唱されているその目標及びミッションという花が咲き続けますように。ありがとうございました。

バングラデシュ・グラミン銀行 創設者 ムハマド・ユヌス博士 講演会 報告

AMDAプログラムマネージャー

高松 知文



12月5日土曜日、東京の武蔵野女子大学にて、ユヌス博士の公開講演会「貧困を撲滅する女性の力」が行われました。当日は雨によりさらに寒さが深まりましたが、会場は300人ほどかもしくはそれ以上のほぼ満員の聴衆で埋りました。私もその一人として博士の講演を聴いてきましたので、皆さんにその内容の大筋をご紹介します。

ユヌス博士は、国際協力・開発援助の分野では、いまや世界的な有名人です。なぜ有名なのか。それは博士がバングラデシュで始めて成功を取めた、マイクロクレジット(Microcredit; 小口貸付や信用貸付、小規模融資などと訳されます)の為です。

この講演から、博士やマイクロクレジット、グラミン銀行のことが分かります。

私の、ここ30年ほどの活動は、どうしたら貧しい人達が“自立”できるシステムをつくれるかの模索でした。私は今日、皆様のような若い人達に自分の経験をお話してできることを嬉しく思います。なぜなら、若い人達こそが未来の担い手であり、世界を変える力になりうるからです。是非皆さんには社会に対して“なぜ?”という問いかけを持ち続けて欲しいと思います。社会をより良くしようと一生懸命に考えるなら、既存のシステムを継承する必要は必ずしもないからです。

バングラデシュはとても小さい国です。しかしその人口は1億2千7百万人にも達し、人口密度は世界の全人口がアメリカ合衆国に住んだとしても及びません。そしてバングラデシュ国民は、その半分以上が20歳未満であり、とても若い国でもあります。

私は70年代初めバングラデシュの大学で経済学を教えていましたが、大学の外では飢饉により多くの人々が死んでいました。私は経済学を学び研究し、それを学生に教えていながら、自分が貧しさに死んで行く人々に何も出来ないことに無力感を覚えました。そこで、近くの村に入って行くことを始めたのです。

ぐに、私は周りの村に暮らす村人たちこそが自分の先生であり、村が自分の大学であると知りました。

私は自分が少しでもその村人達の役に立てることはないかと模索しました。そうするといつも、村人達がいかに小さな額のお金に苦しんでいるか、ということに突き当たりました。

そこで私はある村で村人42人に、彼らが苦しんでいる高利貸しへの返済に幾ら必要か尋ねました。結果は27米ドルでした。一人ではありません。42人全員で27ドルでした(現在だと約3,300円)。私は非常にショックを受けました。なぜなら私はそれまで大学で、数百億ドル規模の5ヵ年計画といったことを云々していたのですから。なのに彼等が必要としているのは、本当にわずかな金額であり、しかも彼等にその金額を貸すシステムが存在しなかったのです。

私は人々に自分のポケットから27ドルを貸し、高利貸しに返済させました。皆とても喜びました。そこで私は「たったこれだけの金額で喜ばれるのならもっと多くの人に同じことが出来ないのか」と考え、地元銀行に行きました。

私は支店長に、村人達の状況、私の貸したお金がすべて返ってきたことを話し、銀行として貧困に苦しむ彼等へ融資することを掛け合いました。しかし当然ながら、答えはノーでした。「あんな貧しく担保のない人達に金を貸したって返ってくる訳がない。どうせ酒やギャンブルに消えるのは目に見えているじゃないか」。彼の主張はこうだったものでした。しかし彼や銀行には、村人達に融資した経験は一切ないのです。

■ユヌス博士略歴

1940年生まれ。国籍バングラデシュ。米国バンダビルト大学で経済学博士号取得。1969から72年まで米テネシー州立大学助教授を務めた後、バングラデシュに帰国し、政府経済局企画委員会副委員長を務める傍らチタゴン大学経済学助教授、75年から89年経済学教授、農政経済計画所長を務める。76年から83年、グラミン銀行プロジェクト主任、83年グラミン銀行専務理事に就任、現在に至る。

私は説得を続けました。

そしてようやく半年経ってから、私が保証人となって300ドルの融資が決まりました。支店長は「どうせ失敗しますよ」と言っていました。私は期限通りに彼に利子をつけて返済できました。村人はちゃんと返済してきたのです。しかし支店長は「貸した人数も金額も小さかったからね」と言います。そこで今度は対象の村を二つにし、村人の数も増やしました。また全額返ってきました。でも支店長は「村の数も二つだけだし、人数も額も小さいからね」と言います。そこで私はもっと村や村人、金額を増やしました。それでも全額返ってきました。それでも支店長は「まだまだ例外だ。もっと対象を増やせばとたんに焦げ付くよ」と言います。

私がここで言いたいことは、「貧しい人=信用できない」というのは嘘だということです。この支店長を始めとして、みな経験もないのにそれを信じてしまっているのです。

こんな経緯から、私は貧しく担保がないために融資を受けることが出来ない人々のための銀行をつくる必要を強く感じるに至りました。新しい銀行をつくるには政府の許可が必要です。そこで私は政府に掛け合いに行きました。しかし政府の回答もノーです。「裕福な層への貸付も焦げ付いているのに、貧しい人達に無担保で貸すなんて！」という反応です。しかし私は交渉を続けました。そして2年経過した83年、ついに政府から銀行として認可を受けることが出来ました。そうして設立されたのが、グラミン銀行です。

銀行として活動することが認められた私たちは、支店で待っているのではなくこちらから村々に入っていく、人々にグラミン銀行の利用を勧めました。そして活動していくなかで私たちは、貸出の半分にまで女性の割合を増やすことを目指しました。なぜなら男性と違い、女性はお金をギャンブルなど一時的で自分だけの楽しみに使わず、子供たちなど家族とその未来のために使う傾向があると分かったからです。

しかし、男性が圧倒的に優位である夫婦関係や社会の伝統、女性がお金を扱うことへのタブー意識などから、女性にグラミン銀行の利用を勧めるのは大変でした。あるときなどは、私は村のはずれの木の下の、女

性の行員が村の女性たちに勧誘するのを見守っていました。ある女性は、「母からの唯一の遺言が誰からもお金を借りてはいけないということ。だから借りられない」と言いましたので、私は女性行員にこう言わせました。「そう、貴方のお母さんは全く正しいです。でもお母さんの時代にはグラミン銀行がなかった。グラミン銀行からなら借りてもいいと言いますよ」。

活動を始めて15年ほど経ちました。今ではグラミン銀行は、約4万の村で活動し、女性の比率は94%にまで達しました。95年3月には、貸出累計額が10億ドルを越え、去年の6月には20億ドルに達しました。そして今年の貸出だけで、5千万ドルになる見込みにまで成長しました。

一番大事なのは、貧しい人へ「信用を供与する」ことではないのです。伝統的に銀行は女性を蔑視していますが、銀行が、借りる人にとって意味があるものになるよう考え、行動することです。

現在では、グラミン銀行は、村の人々が自主的につくった「子供を学校にやり、卒業させる」などの16カ条の誓や、選挙で投票することを奨励しています。96年の選挙では73%の投票率の半数以上が女性という結果になりました。

彼女らが欲しているものは、「与えられること」でも「特別なもの」でもなく、人として正当に受けるべき当然の権利なのです。

以上がユヌス博士の講演でした。今や世界銀行グループも含め、世界レベルの著名人であり、大きな注目を集めながらも、そうは感じさせない気さくで穏やかな語り口が印象的でした。私も含め、会場に足を運んだ多くの人が、ユーモラスに語られる銀行支店長とのやりとりなどから、リラックスしながら、博士の活動とマイクロクレジットについて理解を深めることが出来たと思います。

そして、私が講演に足を運んだのは、AMDAが今後、このマイクロクレジットも含む「ABCプロジェクト」を広く展開したいと考えているからです。

次号で、この「AMDA Bank Complexプロジェクト」についてご紹介したいと思います。

ミャンマー地域医療プロジェクト 毎日が玉手箱

1998年8月

ミャンマーに来て2ヶ月以上経ち、生活もすっかり落ち着きました。先日、とてもよくして下さった桑田先生がAMDAフィールドサイトから任期を終えて帰国し、私はこのプロジェクトでたった一人の日本人になってしまいました。でも不思議とちっとも寂しくありません。桑田先生がいなくなったこと自体は寂しいのですが、

寂しいと感じる暇もないほど忙しく、そしてスタッフがみんな働き者、正直者でチームワークも今のところ抜群で、すこしも心配はしていません。

でも基本的にミャンマープロジェクト全体を見ていかなければならないので、日常業務は過激かつ混沌としています。毎日、政府(保健省)や日本大使館、JICA、UNDP、WHO、UNICEFなどの方々と会って、プロジェクトの進行具合を確認しあったり、問題点を協議したり、新規事業をもらうべくファンドレイジングしたりする一方で、プロポーサルなどの書類作成が膨大な数になります。

さらにスタッフの働き具合をチェックし、年40%にもなるインフレに対処するように、給料や待遇を考えたりもしています。ミャン

マー国内に3つのオフィスがあって、ここヤンゴンがセンターオフィスですが、あと2ヶ所のフィールドサイトにはヤンゴンからバスで12時間かけて行かなければならず、その上2回もバスの事故に遭ったこともあります。電話もなかなか通じなくて、1時間後ようやくつながったこともしょっちゅうで



左から、吉岡医師・筆者・小池総務部長
ミャンマー子ども病院起工式にて

す。このメティエラでは巡回診療やAMDA診療所、給食センター、学校建築、浄水機設置、プライマリーヘルスケアなどなどプロジェクトを推進しています。これらの活動は今までにAMDA事業に携わってきた方々の汗と涙の結晶です。

そして今年の1番のメインはAMDA子ども病院の建築です。このためデザインを話し合い、見積

AMDA調整員
大森 佳世

りを出し、資金集めやセレモニー企画のために、市長や知事、エンジニアとも話し合いました。

ミャンマーはODAがストップしており、外貨収入がないので、道路、通信、発電などのインフラの整備が困難なようです。停電が激しく、つい先日ジェネレーターを購入するまでは毎日、日中は電気が

なく冷蔵庫もエアコンも使用できず、この暑さの中のびきってしまった、何よりFAXとパソコンが使えないので仕事は電気がある夜に集中するため、慢性睡眠不足でした。これでは緊急事態にも備えられないので、ついにジェネレーターを購入したのですが、すると今度は燃料の石油代が問題になります。みんながジェネレーターを使うと石油代は上がり、その石油はすべて国産のものしかない

ので色んなものが混ざって質は悪く、まるでイタチゴッコのようです。音もガンガンうるさくて仕方ありません。そしてジェネレーターは電圧変動が激しいので、エアコンもプリンターもあらゆる電気機器がしょっちゅう壊れています。そしてもう無茶苦茶暑いので、ネパール人のおじ様スタッフでさえ、うちのオフィスにステイすると

「暑い、暑い」とのた打ち回って眠れないと言うので、「日本から来た私も暑さを我慢しているのだから、我慢して下さい」と頭を下げています。

しかしながら、私にとってはとても楽しい毎日です。現地の日本人が一人になったことに加え、プロジェクトが拡大していく中、忙しくてたまらないのですが、ミャンマー人があまりにもいい人たちが多く、娘のように接してくれるので救われています。本来医療部門を中心とする国際開発の分野で来ているはずなのに、いろんなことを教わって、自分自身が成長させてもらっているのです、まさに相互扶助という感じです。保健大臣（もちろん軍人）から『オマダニ』という日本風に言うと少し妙な感じのするミャンマー名をもらったので、いたるところで名乗っていますが、この名前は超・超美人な昔のクイーンの名前なので、的を得た名前とはいえ、少し面映く、みんなからも笑われてしまいます。（ちなみに私の通称はAMDAのキャシーです。）

ミャンマー人は日本人が大好きで、純粋で、きさくな人が多いように思います。アジアの中でもこういった光景が見られる国はそう多くはないのではないかと思ったりもします。この国の潜在能力や良いところはたくさんあるのに、日本の報道の軍事政権を批判する欧米メディアの手法に沿った一面的なところはとても残念だと思っています。先月前述の日本医師が帰国直前に40度の高熱を出して入院し、その後バンコクのジェネラル

ホスピタルへ緊急輸送ということでも私も一緒にタイまで飛んだのですが、タイですっかり里心がついてしまい、早くヤンゴンへ戻りたい自分に気付きました。私はミャンマーと、今の仕事がとても気に入っています。毎日が玉手箱のようです。

現在はエイズプロジェクトに取り掛かっています。エイズが深刻なタイを横にひかえ、ここもかなりの数の患者がいます。うちの巡回診療の患者さんにも舌が真っ白になってカビが生え、見るからにエイズという患者がたくさんいます。しかし知識がないため本人はそれと気付かず（たとえ気付いてもエイズ検査はお金がなくてはできません）、啓蒙教育等も遅れているので、落ち着いてきたタイよりも、放っておくと事態はよほど深刻だという見方もあるようです。

ここでは在留邦人が肝炎に罹ったり、結膜炎が大流行しており、なかなか健康を保つのも大変です。私は幸いにも一度の下痢すらしていませんが、蚊にいっぱい刺されて痒くて仕方がない毎日ですが、何とかやっています。

AMDAの本部とは毎日Eメールでやり取りをしています。世界って以外に狭いですよね。緊急時にはFAXやTELでやり取りをします。Eメールの送信は2時間くらい遅れます。

（仕事編）

コーディネーターである私の仕事は、医師をはじめとするAMDAのスタッフたち、ミャンマーの住

民、ミャンマーの政府、ドナーである日本大使館やJICA、国連機関などの関係諸機関、私たちの活動を支えて下さる支援者たちをAMDAのポリシーに照らし合わせながらハーモナイズさせていくことだと思っています。人が集まる所には必ず利害関係者が生まれ、それらに対立することもしばしばあります。それでも目指すゴールが同じなら、必ず共存できる道があると信じています。関係者がそれぞれの言い分を主張しながら、少しでも気持ちよく仕事を進めて行けるように、コーディネートしていくのが私の仕事なのです。

ミャンマーに赴任して3ヶ月、あっという間に時間が過ぎました。ヤンゴン駐在の私は週間スケジュールをたてて、とにかく積極的に関係機関に足を運びAMDAを売り込み、相手の方針を確認し、カウンターパートと少しでも太いパイプを作るように心掛けています。そうした中で、こんな青二才の私が保健大臣をはじめとする関係諸機関のヘッドたちと話ができると思うだけで有り難いことだと思う。多くの関係者の顔と名前を一致させ、初めは何を言われてもドキドキして戸惑うことが多々あったが、勇気を出して飛び込んでいくうちに、今は関係機関を訪れて話をすることが、仕事の中でも一番の楽しみとなりました。

私は医療スタッフではないので、直接に自分がしたことによってミャンマーの人々に喜ばれることはなく、その点が残念で物足りないところではあります。しかし援助にはいろんな形があるのだから、その中で

自分ができるパートをこなしていこうと思っています。自分がしたことによって関係機関からファン্ডを集めるのに寄与することができ、また医療スタッフなどが少しでも気持ちよくここに滞在し、そうした人々の活動を通じてミャンマーの人々に喜んでいただけるならとても嬉しいと思います。そうした中で関係者から「ありがとう」と言われると、照れくさいけれどもとても嬉しいと実感する。莫大な数のプロジェクトを抱えて次々と休む間もなく発覚する問題に対処し、次のステップへ進むための用意を重ね、それらをこなしていくだけで今までは慌ただしく時間が過ぎてしまった。今後はもっと住民の意見を聞き、AMDAの活動によって得られた彼らの喜びを実感できるまでになりたいと思います。

人間関係がスムーズなら仕事の半分以上は片付いたようなものだという見解を聞いたことがある。ここに来て、まさにそれを実感しました。結局、人と人との関係がすべてであろう。まずは自分たちのAMDAスタッフが目標に向けて一丸となる必要がある。AMDAのフィールドへ行くためにはバスで片道12時間の行程を経なければならず、インフラ事情のために電話が通じるにも30分以上かけて何度もトライしなければならず、激しい停電のため、また電気があるときでも回線事情が悪いためFAXが使えず、やりとりは思うようにいかないのです。けれども今後もできるだけフィールドを訪れ、スタッフたちと語り合い、そしてミャン

マーでの活動を思うように進められるようバックアップしてくれるAMDA本部や支援して下さる方々への心からの感謝の気持ちを忘れずに仕事を進めていきたいと思っています。

私は父の転勤のため、生まれた時から2~3年おきに日本全国を転々としてきました。子どもの頃は慣れたと思った頃にまた転校の繰り返しに嫌気がしていたこともあった。小学校の低学年の頃、方言によって言葉も全く違う転校生になかなか馴染めず、何も話せずイジメにもあい、ずいぶん辛い思いをしたこともあった。そしてどこへ行っても自分がどこか異邦人のような感じさえしていたこともありました。TVなどで目にする難民の様子が他人ごとのように思えなくてこの世界に飛び込んだ原点はここにあると思います。

しかしながらこの転校体験は今となっては有り難かったと思っています。どんな環境にもすぐ馴染めるようになったし、ちょっとしたことでは根を上げなくなったし、何より弱者の立場が少しでも理解できるようになった。大学生になって一人暮らしをしてみても大変だったろうなど、親の有り難さがつくづくわかりました。家族のおかげでこの転校生活も耐えられたんだとわかりました。そして行く先々で本当にすばらしい人々に出会い、この人たちによって自分は支えられてきたんだと痛感しています。今度は私が経営学を学び、卒業後は社会修行のためと思い、社会の

要でもあるお金を動かす金融機関で営業職として外回りをしました。そこでまた人と触れあうことにより非常に貴重な体験ができました。それからUNHCRの短期インターンとして海外の難民キャンプへ訪問。この世界でやっていくための専門性を身に付けようと、大学院で国際公共政策について学んだ。フィールドでの体験から卒業後はまずは草の根NGOでやっていこうと決めており、海外でもお世話になったことのあるAMDAに就職。悔いのない選択だったと思っています。将来のステップとして今を精一杯がんばろうと思う。やりたいことが出来るのだから、給料は安くても全く（と言うと言い過ぎかもしれないが、ほとんど）気にならない。これは何も日本の国際貢献のためとか、そんな難しいことを第一と考えてのことではない。自分のためである。人に喜ばれながら、自分も成長していけたら有り難いことだと思っています。

これからは日本のNGOもよりシステムティックになり、もっともっと成長していくべきでしょう。そのためには日本の社会全体がNGOに対して、より興味を拡大させていってくれたらと思います。そのために自分たちの活動をどんどん紹介していきたいし、一人でも多くの人たちと活動を共にしたい。一人ひとりの力は小さいけれどもそれが集まって大きくなれば、国際貢献というような大義名分がなくても世界中で人々がわかり合えると思います。

ひと

「人生七十古来稀なり」

岩村 高雄 (岡山県笠岡市)

「人生七十古来稀なり」(杜甫)から古稀は七十歳の称とされていますが、私も来年にはその域に突入します。しかし、最近は医学の発達、社会構造の進歩とともに70代も現役でバリバリ活躍している人が多くいます。元気であれば「お荷物」にならないものです。

私が奇術を始めたのは岡山市で公立中学校の教員をしていた昭和54年、約20年前のことです。PTAの会合や生徒会行事などでトランプを使った簡単な手品をしたところ大きな拍手や歓声があがり、その快感がこの奇術の世界にのめり込むきっかけとなりました。

教員を退職した昭和63年に「福山奇術倶楽部」に入会し、プロの指導を受けることになりました。自宅での猛練習も功を奏し今では約300種類の奇術を習得し、自称「街のエンターティナー」を気取っています。※ミスターサンロックと言えば笠岡市近辺では有名です。(→藤井のコメント)

子供会、保育園、幼稚園、小中学校、婦人会、敬老会、福祉施設、公民館行事など声がかかれば時間の許す限りボランティアで奇術を披露しています。新聞、テレビなどのマスコミで取り上げられたお陰で県の目に止まり、県から手品を通

して交通安全の啓蒙活動への協力を依頼され平成7年から「県交通安全教育講師団講師」に委嘱され、岡山県内各地で年間50回ほどの啓蒙活動を展開しています。

基本的にはボランティアなのですが、時には若干のご芳志を戴く場合があります。そのときはありがたく戴いて毎年年末にAMDA、交通遺児就学援助基金、障害者福祉基金などに少しずつですが募金しています。

私は「子どもに夢を、お年寄りにほほ笑みを」をモットーにしています。様々な人達とのふれあいの中で情熱を持ち、夢を与え続けるためのチャレンジ、皆さんの喜ぶ顔がうれしくて……、意欲を持って理想を追いかけている限り青春時代、奇術は私のライフワークです。手足が動く限り続けるつもりです。

奇術のアシスタントでもある私の妻は瀬戸内海の玄関口(笠岡市神島)で小さな喫茶店をしています。店内は「街かどふれあいギャラリー」となっており、障害者の方々の作品が常設されています。また、市内の障害者施設の物品・農産物の委託販売もしています。人の出入りが多いことから

1) 阪神大震災、日本海油災、奥尻



島震災等災害時の救援募金

- 2) 使用済みテレカの回収
 - 3) ネパール子ども病院にタオルを贈ろう
 - 4) AMDAの募金箱設置
- などなど彼女なりに自分のできる範囲で様々なボランティア活動に取り組んでいます。これからもこの喫茶店に集まる人達の善意を活かせることを考えていきたいとはりきっています。

私たち夫婦はそれぞれのやり方で時には助け合いながらボランティアを共通のライフワークとして生きていきたいと考えています。私たちにお手伝いできることがありましたらいつでも声をかけてください。

連絡先:

カフェレストラン「サンロック」

笠岡市神島瀬戸3885-3

TEL0865(67)4609

(文責: 藤井逸子)

地域

みんなで力を合わせて 子ども病院へ救急車を贈りましょう！

AMDA ボランティア 藤井 逸子

12月6日(日)午後6時30分から里庄総合文化ホール「フロイデ」で「AMDA子ども病院に救急車を贈る会」発足記念クリスマスチャリティーコンサートが開かれました。当日は菅波代表、ニルマル先生も参加されネパール子ども病院のお話などをして頂きました。予想

心となって結成し、30年余のキャリアを持つアマチュアジャズバンド“NEW SWING DOLPHINS”。

3年前からそれぞれにAMDA支援コンサートをしていました。コンサート会場でのパネル展示、AMDAグッズの販売、タオル集め、使用済みテレカ集め等で両方の支援コンサートに参加していたボランティアが思い付きでこのふたつの団体をひきあわせました。

5月に開催された“NEW SWING DOLPHINS”の定期演奏会に“音楽同好会フロイデ”を招待したところすっかり意気投合し、プロデュースと出演者ということで協力してAMDA支援コンサートをやりたいということに話がまとまりました。

漠然としたAMDA支援ではなく具体的な支援をと考えAMDA本部に相談したところ11月に開所するネパール子ども病院に救急車が必要だとの返事でした。救急車といっても日本の救急車とは異なり、大型の四輪駆動車でストレッチャーと車載冷蔵庫が積めるものでよいとの話でした。メンバーのひとりが自動車販売に携わっており見積もりしたところ送料込み300万円位でいけるのではないかと



「AMDA子ども病院に救急車を贈る会」
発足記念 クリスマス チャリティーコ
ンサート 最後にサンタクロース登場

を裏切る大盛況で関係者はほっと胸をなでおろしました。というのもこのコンサートは多くのボランティアの協力で実現したものだからです。

岡山県里庄町で「子ども達に良い音楽を地元で聴かせたい」と平成3年から音楽プロデュース活動を続けている“音楽同好会フロイデ”。広島県尾道商業高校OBが中



ラストステージ「ジョイント」のリハーサル風景

判断でした。

「300万円集めてネパール子ども病院に救急車を贈ろう!」と目標が決まると少しでも早く実現しようと話が急に進み出しました。尾道市、福山市、笠岡市、里庄町とそれぞれ住んでいる場所も職業も異なる人達の集まりなので打合わせに集まるのもひと苦労でしたが8月から何度も打合わせを重ねて実現にこぎつけました。そんな中うれしいことにメンバーのネットワークで東京のプロのグループがボランティアで出演してくれることになったのです。ジャズバンド“大山日出男カルテット”とロックグループ“BLUE ANGEL”です。プロがボランティアで出演してくれるのに観客が少なくは申し訳な

いとチケット販売、広告集めにも力が入りました。

コンサートでは様々なボランティアが活躍しました。舞台進行係(金光学園吹奏楽部のOB)は演奏時間の調整、装置のセッティングが大変でした。演奏をベストの状態で聴いてもらいたい、ネパール子ども病院の話でニルマル先生にして頂きたい、お客様にクリスマスプレゼントがあれば楽しいかな等……。接待係は出演者、スタッフ合わせて約50名に安くておいしいお弁当を用意したい、ベストの演奏ができるようにおいしいお茶を入れてあげよう等……。総務・受付係はいい笑顔でお客様を迎えよう、小さなお子様連れでも安心して楽しめるようにベビーシッター

の準備、HAPPYな気持ちで帰って頂けるように心配りをしました。そしてAMDAボランティアはパネル展示、募金、救急車に積み込んでネパールの子供達に届けるタオル集め、カレンダー・テレカなどのAMDAグッズの販売など。

「AMDA子ども病院に救急車を贈る会」がマスコミに取り上げられたこととそれぞれのネットワークのおかげで浅口郡5町をはじめとして地元の協力が頂けたこともうれしいことでした。

今回の支援コンサートは「AMDA子ども病院に救急車を贈る会」のスタートです。機会を見つけて募金活動、支援コンサートを開き1年位で実現したいとみんなはりきっています。

おみやげ・喫茶・お食事

岡山駅名店街
ピーチプラザ

岡山駅2F 新幹線改札口前

☆ボランティアさんの感想☆

舞台進行係としてフル回転 だった仁科公宏さん

当日は「お客さまがいっぱいきてくれるかな？」という我々の心配をよそに、開演前から外には長蛇の列ができていました。第一部は“BLUE ANGEL”というロックグループによる演奏。元気のいいサウンドで観客を沸かせました。次は“NEW SWING DOLPHINS”の演奏でビックバンドならではのノリのいい曲、そして“大山日出男カルテット”。すばらしいジャズサウンドを聴かせていただきました。最後に参加グループ全員によるクリスマスにちなんだ曲の演奏でお客さまは大喜び。

素敵な時間を過ごす事ができました。本当に微力ではございましたが、このチャリティーに参加できましたことを心より喜んでおります。

尾道市から参加したAMDAボ ランティアの井上智香子さん

AMDAのボランティアとしてコンサートのスタッフに加わった。以前何度かコンサート会場ではAMDAグッズの販売をしたことはあるが、今回は接待係を担当した。

出演者にホカホカの夕食と冷たい飲み物をサッと出す。他のスタッフの夕食セッティングetc. スタッフとして一步踏み込んだ経験をさせて頂いた。いろいろな事柄は沢山のやさしい手が添えられて成り立つものと思いを深くしたところである。

パネル展示、会場設営、タオ ル集め等最後まで大活躍だっ た中学1年生の安福泰啓君

「ボランティア」に無関心だった僕は今回小学生の時からAMDAボランティアをしている同級生に誘われて初めて参加させてもらった。会場に着くとAMDAの腕章をするように言われてスタッフの一員になったような気持ちになった。最初は何をしたら良いのかさっぱりわからなかったが、スタッフの人達に次々と用事を言われているうちにだんだん

わかってきた。普段僕たちがお客として来て見る掲示物の展示、本・CDの売り場の準備、抽選のプレゼントの準備などたくさんのお仕事があった。驚いたことにこれらの準備を約6時間も前からするのだ。

しかし、僕たちには特権があった。仕事の合間にリハーサルを見る事ができたし、本番中の舞台裏に物を運んだり、楽屋にお客さんのためにCDにサインを貰いに行ったりと普段体験できないことが体験できたことだ。これはとてもうれしかった。

途中アクシデントがあったものの無事、大成功に終わった時の感激はとてもすごくてなんと言ってもいいかわからない。

このようにたくさんのお体験をさせてくれたボランティアに、是非また参加したい。

「AMDA子ども病院に救急車を贈る会」寄付者

(11月～12月9日迄)

山本日出子 西山 芳 中谷 勲 桑田 徹也 竹原 成信
中村 正夫 山本 厚子 青木 恒夫 瀧川清統 安藤 實
堤 典 藤元千代美

財団法人倉敷中央病院

医療法人清風会日本原病院

重井医学研究所附属病院

金光学園内音楽部吹奏楽団父母の会

金光学園内金光ウインドアンサンブル

●お問い合わせ

「子ども病院に救急車を贈る会」

電話 0865-64-3213

代表 北浦 信夫

あした
未来を考える
システムの包装商社



パステム マツザワ

〒791-8016 松山市久万の台689 TEL 089-925-7811

パステム オカヤマ

〒702-8048 岡山市福吉町18-7 TEL 086-263-5516

第3回医療通訳養成講座の報告

熊木 由美

11月14日に南大和病院老人保健施設さくらプラザで第三回の講座が行われました。田宮菜奈子先生により内科領域の講義が行われました。

南大和病院での外国人医療の状況、老人訪問看護制度、介護保険制度、検査について説明がありました。その内容は次のようなものです。

- ・中国語、スペイン語、ポルトガル語を母語とする人が多く受診する。
- ・健康保険に未加入の人が多く、医療費の問題がある。
- ・治療法の選択肢、薬の副作用、将来の見通しなど日本人に対しても説明する必要があるが、健康保険未加入の外国人の場合は自己負担額が高額になるため、特に詳しく説明している。
- ・検査について、簡単な内容の説明と注意があった。検査前の絶食など命に関わる点は守るよう、確実に伝えてほしい。また、検査結果がいつ出るか確かめることが必要である。
- ・通訳者が不明な点については、医師に日本語でもいいので書いてもらった方がよい。

曖昧にするとトラブルのもととなることがある。約2時間にわたる盛りだくさんの内容の講座でした。受講者からも多くの経験談や質問が出され充実した講座となりました。

講座へのお申し込みは小林国際クリニック（電話0462-63-1380）まで。月一回、原則として土曜日に講座を開催します。多くの方の参加をお待ちしております。



支部紹介	AMDA 神奈川	TEL 0462-63-1380
	AMDA 兵庫	TEL 0798-71-9821
	AMDA 沖縄	TEL 098-854-5511

第2回『横浜国際協力まつり'98』に参加して

AMDA 神奈川支部副代表 松本 哲雄
(川崎市総合教育センター 障害児教育研究室)



11月14～15日、横浜市中区山下町の産業貿易センターで開催。参加70団体。体育館ほどの1階フロアはNGO各団体の展示&バザー。さらに1階フロアの一角と3階ではセミナーが開催され、開発教育ワークショップ、幼少児教育の海外援助、ネパールの少女売春と人身売買、国際交流の船旅、国際支援プログラム、女性の相談室から見た国際化、ベラルーシの子どもたち、スタディツアー報告会などがテーマでした。また山下公園に面した屋外ステージでは、インドネシア、フィリピン、カンボジア、ネパール、モンゴル、南米、日本の音楽や民族舞踊が披露されました。

『AMDA神奈川支部』は篠原がチーフになり準備の初段階から手掛け、本部の実行委員を兼務。神奈川支部のブースは溝内、山本がバザー提供品の販売、松本が主にAMDAの活動を来訪者に説明しました。

AMDAのチラシ6種類、うち本部から3種類、支部独自で作成した『AMDA神奈川支部』『ネパールあしながおじさん・おばさんプロジェクト』『医療通訳養成講座受講生募集』の3種類（それぞれ200～300枚）を配布しました。

展示はAMDAの旗。パネル写真（ネパール・カトマンズ市内のスナップ、ダマックのAMDA病院附属医療技術者養成学校：以下AMDA病院附属学校にお

ける奨学金授与式)。そしてチラシの拡大。当初電気製品の使用が認められると言うので、ネパールのVTRを編集して持参しましたが、電源を切られてしまい、2日目はラジカセでネパールのポップスを流しました。販売と説明で多忙だったのは14日午後で、売上も8割がこの時間帯に集中しました。

「AMDA神奈川支部」として説明の中心はネパールにあり、9月24日のダマックAMDA病院附属学校での奨学金授与式、11月2日のプトワールのAMDAネパール子ども病院開所式と附属障害児学校起工式について話した。

また、下記のような質問がありました。

* 来訪者の60歳代歯科医ご夫妻、「セブ島へ数度診療活動に言ったことがあり、歯科診療補助表が欲しいが、ぜひ一度小林先生（AMDA神奈川支部代表）に会いたい。」

* 米国医療機器メーカーGEのセールスエンジニアはJICA経験者で、「中古医療機器のプレゼント先がないか」と打診があり、別のJICA・OBから「ホンジュラスの洪水に対して、AMDAと連携を取りたい」ということで、本部へ連絡して頂くよう伝える。

* 茨城県の女子高生、「国際協力まつりを見る為に横浜までやって来ました。今夏ネパールNGOを介して現地で活動したが、AMDAの活動を知りたい。」

* 60歳代の男性、「妹が看護婦をしているので、AMDAのことをもっと知りたい。」

* その他、数人からAMDAの各国支部や活動状況、緊急救援の中での薬剤の位置付け、AMDA国際大学の進捗具合について質問を受ける。

AMDA会員が必ずしも医療関係者ばかりではないという前提で、AMDA本部・日本支部（神奈川支部のような）と自治体単位の支部が果たせる役割の違いやトリアージについて来訪者と話し合いました。

なおバザーの売上金の53,770円はプールして、引き続きネパール・ダマックのAMDA病院附属学校奨学金に充当する予定ですが、今回の反省点として早くから話し合っただけでバザーを計画。またチラシ等の配布方法、説明の内容についても事前に十分検討しておく必要があると感じました。

(写真提供:篠原真理子)



朽木 便い

岩井 くに

見ると聞くとは大違い

(自治医科大学動物学助手)

情報化社会、いつのころからか日常用語になりました。今の日本では、発信された情報は瞬く間に手元に届きます。インターネットだけでなく、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌...。まだまだあります、街頭のモニター、電車の広告、宣伝カー、配られるチラシ、ダイレクトメール...、街中に情報が溢れかえっています。文字や音声に加えて、画像の情報も増えました。実際に手に取ってみなくても、実際に行ってみなくても、実際に体験しているような気持ちにさせられてしまいます。でも、本当にそうなのでしょうか？

私はこの4月から大学の一角にある地域社会健康科学研究所の研究員になりました。研究テーマは「医療スタッフのへき地勤務支援システムの構築」。今年は「産休・育休」がメインです。医学生から教授まで、学内・学内とりまぜたチームで医師の仕事と育児の両立の話をしているうち、話がかみ合わなくなってきました。どうも医学生が生身の子どもを実感していないようです。少子化で兄弟が少

なくなっただけに受験勉強で子守をする機会もなかった彼女らの子どもに対するイメージは、テレビCMやドラマに出てくるぴかぴかにきれいで、にこにこ笑っている上機嫌の赤ちゃん。じょ、冗談じゃない、「あなた、そんな1日に何分あると思ってるの？」

実際の赤ちゃんを表現するなら、泣いて、おっぱい飲んで、排泄して、眠ることを毎日繰り返す体重数kgの動物というのがぴったりです。寝ている内はまだいいですが、はいはいが始まると目が離せなくなります。ましてや歩き始めたら...家中大騒動になること請け合いです。子守の経験もなく、かわいい上機嫌の赤ちゃんだけをイメージして、いざ産んでみたら、目の前にいるのがしょっちゅう泣いて排泄ばかりしているぐにゃぐにゃした生き物だったのでは、新米おとうさん、おかあさんのショックはいかばかりでしょう。相談しようにも、昔と違って、近所に子育て経験豊富なおばさんたちがいるとは限りません。おとうさんには仕事という逃げ道もありますが、子どもと

向き合わざるを得ない専業主婦のおかあさんたちは、どうやって息抜きするのでしょうか？ある調査では「自分は子育てに向いていない」と回答したおかあさんが全体の65%にも達したというのうなずける話です。

え？子どもを産んだこともない私が子どものことを言えるかって？私にも子守の経験はあります。友人の赤んぼうの子守をさせられ、鍛えられました。泣きわめく子どもを腕がしびれるまで抱き続け、おっぱい飲んでるうちに吐いた吐物を拭いてやり、おしっこのおムツを変えたと思ったらウンチする子どもをひっぱたきたくなるのをようやくこらえ、眠くなってぐずる子どもにお手上げ...この貴重な実体験を通じて、私は子守のポイントは手抜きだと悟りを開くにいたりしました。真剣に子どもと遊んでごらんささい、15分で大人の方がへばります。生返事をしながら、体をなるべく動かさずに、子どもに運動させ、目を離さないように放っておく。「飽きたら帰ってしまえばいいんだから他人の子守は楽でいいなあ」と自分が親を苦労させたことなど棚に上げて、一人つぶやく私でありました。

広告募集中！
お申し込みは

(株) JR西日本コミュニケーションズ
086-223-6964 岩井
(株) 新通エス・ピー・センター
06-533-6191 青山

あなたのために、いいものを.....
La forêt 緑
倉敷市水島北春日町13-18
TEL086-448-6011

AMDA 国際医療情報センター便り

1. 電話による相談（無料）：外国語の通じる医療機関の紹介、日本の福祉・医療制度案内など
2. 外国人の医療問題に関するシンポジウム、セミナーの開催
3. 「11ヶ国語診察補助表」「9ヶ国語対応 服薬指導の本」
「16ヶ国語対応 歯科診察補助表」および「両親学級の資料」の出版、販売
4. 東京都健康推進財団からの受託事業（センター東京）

センター東京

〒160-0021 東京都新宿区新宿歌舞伎町郵便局留

相談 TEL: 03-5285-8088

事務局 TEL: 03-5285-8086 FAX: 03-5285-8087

対応言語: 英語・中国語・スペイン語・韓国語・タイ語:

時間

月曜日～金曜日 9:00 ~ 17:00

ポルトガル語: 月、水、金曜日 9:00 ~ 17:00

フィリピン語: 水曜日 9:00 ~ 17:00

ペルシャ語: 月曜日 9:00 ~ 17:00

センター関西

〒556-0000 大阪市浪速区浪速郵便局留

相談/事務局 TEL: 06-636-2333 FAX: 06-636-2340

対応言語: 英語・スペイン語: 月曜日～金曜日 9:00 ~ 17:00

時間 ポルトガル語/中国語: 曜日によって対応可。事前にお問い合わせ下さい。

ホームページ <http://www.osk.3web.ne.jp/~amdack/>

電話相談～今後の課題～

特に重い病気、重病で国に帰りたいと相談されたとき、言葉が通じる病院が見つからず通訳ボランティアを探さなくてはならないといった相談を受けた場合、相談者に情報を提供をした（電話を切った）その後がどうなったか気になる事がある。何かをした後に結果が出ないと中途半端で、終わった実感がなく気持ちが残ってしまうのだろうか。ある問題を相談され、相談者の状況を知った時から、相談員としてその問題を抱え込む癖がついているのかもしれない。また、十分にアドバイスできなかつたと後悔して、その後が気になり眠れなかったという相談員の声も聞く。このような感情を持つのが一般的だろう。

しかし、電話相談では相談者が電話を切った後、問題が解決したかどうか結果を知らせてくる人はほとんどいない。相談後の結果を知る事はまずないと言っても過言ではない。稀に結果報告の電話が入るが、年に数回と言った具合。では、結果がわからない場合、どのように相談員が気持ちを切り替えたら良いのだろうか。

以前センター内の相談員へ相談に対するストレス解消についてのアンケートを行った。その結果、「気分転換をする」、「センター内の相談員同士で抱えた問題を話し合い、自分で抱え込まず、問題を共有する」といった方法で切り替えをしている相談員が多いのがわかった。これは自分の気持ちを整理をするための方法の1つであるが、もう一つ切り替え方法がある。相談者から相談後に電話がかかって来ないのは何らかの形で問題が解決したからと考え、相談者が自分で問題解決できる能力を持っているであろう事を信じる事である。相談業務では、このような自己の精神衛生管理（ストレス解消）は不可欠だ。なぜならば、精神的に健康で安定していなければ、次々に入ってくる相談に的確に判断して対応できなくなるからである。

私は、センターに2年間勤務して相談業務に携わり、電話相談には限界もあると実感した。電話相談では、相談者本人との間に電話線一本でしか繋がっていないという壁があり、見えない状態で相手の状況や抱えている問題を上手に聞き出さねばならないという難しさがあり、上手くコミュニケーションが取れないと間違った回答をしてしまう恐れがある。又、お互いの反応が見えないのも結果が気になる原因の1つとなる。しかし、一方、姿が見えないから人に言えない事を正直に話せる、いつでも日本中のどこからでも電話線一本で言葉の通じる相談員にアクセスできるという利点は大きい。外国人にとって、たとえ日本語が話せる人でも母国語で相談ができるとどんなに気持ちが落ちつくだろうか。その情報やアドバイスが如何に少量であっても、相談者にとって大なり小なり問題解決の道標になっているだろう。

そして、私達相談員は、精神面、情報面など、何らかの形で相談者の役に立っていると信じて、今後も相談者との信頼関係を築けるよう1本1本の電話相談に対して丁寧に対応して行かなくてはならないと思う。自分自身も相手も納得のいく相談に近づくために生きている情報の収集をしたり、相談員の精神衛生を心掛け、センター内の信頼関係やコミュニケーションを大切にすることが電話相談員としての今後の課題だと思う。

☆☆☆『PROCESSION』に参加して☆☆☆

10月25日神奈川県大和市にあるペルー人の集まるカトリック大和教会にて「PROCESSION」というキリスト教の行事が行われた。これは年1回ペルーでも行われる行事で、表にキリスト画像と裏にマリア画像が描かれた壁画の御輿を紫のマントを身に付けた信者達が担いでパレードをするものである。昔10月にある村で大きな地震が起きたとき、村に残った1枚の何も描かれてない壁にキリスト像が現れた。村人達が、この壁は神様が送って下さったのだと思い、お参りに行くようになり、その後病気が治ったりした事から、キリスト像の壁画を10月に祭るようになったとのこと。日本でも毎年10月に神奈川県の中で1番ペルー人が多い大和市で、ペルー人協会が主催して行われている。大和市外からもペルー人が大勢集まると言う情報が入り、早速、事務局Yさんとスペイン語通訳相談員Oさんと一緒に「PROCESSION」に参加して、センターのチラシを配ってきた。

この日、天気は快晴。教会の敷地内には500人以上のペルー人が集まり、日本人は私達を含め僅か4、5人しかいない。まるでペルーにいる観光客になったような錯覚を起こす程、ペルー色に染まった会場に驚いた。日本の御輿がお宮から出ると同様に、キリスト像の御輿は教会から出発し、町を一回りしてから教会に戻り、ミサが始まった。ミサの後は、教会の周りがあるペルー料理やフィリピン料理の出店で、飲み食いしながら交流を深め、夕方キリスト像の御輿を教会前で解体。キリストの御輿を担ぐのは、神父や主催者、ペルー領事等で、その20人位の中心人物達が全員紫色のマントを被り、太い白い縄を首から下げていた。ちなみに、ペルーでは、この行事が行われる10月の1ヶ月間、願い事がある人は毎日紫色の衣服を身に付けるそうだ。それ程大切な行事らしい。

印象に残っているのは、行事の最後に御輿を解体する前、神父が赤ちゃんを抱き上げ、キリスト像の十字架に沿って赤ちゃんを揺り動かし、子供の身を守られるように祈っていた様子だ。次から次に母親達が子供を差し出していた。

さて、前置きが長くなってしまったが、スペイン語で書かれたセンターのチラシ配りの効果はどうだったかと言うと、かなり好評。チラシを渡すと「こういった情報があるのは知らなかった。とても助かる。」「グラジオス！」（ありがとう）と大層有り難くお礼を言われ、その上、私も私もとチラシを求めて手を伸ばしてきた。このように、いろんな人々に出会って必要とされている事を実感でき、心から参加して良かったと思った。今後も、私達のサービスを求めている人達が集まる所へ出向き、より多くの人の声に耳を傾けながら、センターの存在を広め、活動を続けて行きたい。（センター東京/N.N）



AMDA 国際医療情報センター

運営協力者

1998年7月～9月受付 1998年度新規・継続会員、ご寄付者（順不同敬称略） ご協力ありがとうございます。

ご寄付（個人）	小久保陽子	月島聖公会	岩本美知
倉茂和幸	佐藤光子	葛飾茨十字教会	野間里香
伊藤真由美	坂田 棗	聖ルカ礼拝堂	間瀬まさ代
乙幡和雄・義子	具 順異	池袋聖公会	藤村雄伍
神戸 謙	黒子堯子	小金井聖公会	
広瀬勝貞	中戸純子	興和新薬株	学生会員
谷 昌興			上間美穂
相馬久子	ご寄付（団体）	一般会員	朱イム
蔭山晴一	福川内科クリニック募金箱	平井敬一	
橋本英雄	久松園芸株式会社	水越宏和	団体会員
西成民夫	日本聖公会東京教区	馬場憲夫	つくばメディカル・センター
野和田リーコ	聖アンデレ教会	吉本邦晴	クラヤ薬品
鹿島りえ	三光教会	井上美由紀	
庵原典子	東京聖マリヤ教会	片山博仁	助成金
青木和子	聖パウロ教会	高木史江	日本財団
香取美恵子	目白聖公会	神戸 謙	
神藤喜美子	聖バルナバ教会	畑山啓悟	お名前を掲載しない方6名
津島真利絵	東京諸聖徒教会	松下彰宏	
マイテ アスコーナ	東京聖テモテ教会	木村真人	

ご寄付のお願い 当センターは寄付などにより運営されています。おいくらからでも結構です。

ご支援よろしくお願ひ申し上げます。

会員募集 精神的、経済的に援助して下さる会員の方を募集しております。

当センターはAMDA（本部岡山）とは会計が別のため、独立した会員制度を設けております。

AMDA本部の会員ではございませんので、お間違えのないようお願いいたします。

会費：個人会員 1口 6,000円 / 団体会員 1口 20,000円

学生会員（高校、大学、専門学校生） 1口 2,000円

ジュニア会員（中学生以下） 1口 1,000円

4月より翌年3月までの1年間とする。何口でもけっこうです。

広告募集 年間12万円

以上詳細はセンター東京（03-5285-8086）までお問い合わせ下さい。ご協力をお待ちしております。

郵便振替：00180-2-16503 加入者名：AMDA国際医療情報センター

銀行口座（広告料のみ）：さくら銀行 桜新町支店 普通5385716

口座名：AMDA国際医療情報センター 所長 小林米幸



16カ国語対応

歯科診察補助表

好評発売中！

英語・スペイン語・ポルトガル語・中国語・韓国語・ペルシャ語（イラン）・タイ語

ラオス語・カンボジア語・ベトナム語・ベンガル語（バングラデシュ）

フィリピン語（カタルーニャ）・ロシア語・フランス語・インドネシア語・マレー語（マレーシア）

本体 ¥5000（消費税・送料別） お問い合わせは：センター東京 ☎03-5285-8086



医療経営財務協会

会長 公認会計士 長 隆
税理士

〒171-0022 東京都豊島区南池袋 2-27-17 グリーンパークビル 7F
TEL 03-5951-0707 FAX 03-5951-0710
http://www3.tky.web.ne.jp/~cpaosa/

翻訳・編集・デザイン・自費出版・印刷
ホームページ作成等、承ります。

英語、中国語、韓国語、タイ語、モンゴル語、
スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、等
多言語対応です。



株式会社インターブックス

■AMDA 国際医療情報センター発行
「16ヶ国語対応歯科診察補助表」
等作成

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-10-18
Tel:03-3204-0263 Fax:03-5272-9897
URL:http://www.interbooks.co.jp
E-mail:info@interbooks.co.jp

内科・理学診療科
医療法人

福川内科 クリニック

大阪市東成区東小橋 3-18-3
ボンゲービル 4 F (住友銀行鶴橋支店前)
TEL06-974-2338

診療時間

午前 9:30~12:30 午後 3:30~6:30
土曜日 午前 9:30~午後12:30
日曜日 午前10:00~午後12:30
休診日 木曜日、祝日、最終日曜日

産婦人科 心療内科
OB / GYN / PSYCHOTHERAPY

伊勢佐木クリニック

ISEZAKI WOMEN'S CLINIC
〒231-0045 横浜市中区伊勢佐木町 3-107
Kビル伊勢佐木 2階
TEL 045-251-8622

内科 (老人科)・理学診療科

医療法人社団 慶成会



青梅

慶友病院

〒198-0014 東京都青梅市大門 1-681 番地

●入院のお問い合わせ—TEL 0428-24-3020 (代表)

院長 大塚 宣夫



PAX INTRANTHUS
SALUS EXENTHUS

医療法人社団
慶 泉 会

● 町谷原病院

外科 肛門科 泌尿器科
整形外科 形成外科
脳神経外科 内科

〒194-0003 東京都町田市小川 1523
TEL 0427-95-1668

● 町谷原クリニック 人工透析センター リハビリセンター

〒194-0003 東京都町田市小川 1530-6
TEL 0427-99-6500

16ヶ国語対応 歯科診察補助表

英語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語、
ベルシヤ語、タイ語、ラオス語、カンボジア語、ベトナム語、
ベンガル語、フィリピン語、ロシア語、フランス語、
インドネシア語、マレー語

外国人が安心して歯科にかかることができるよう、また、医
療機関・医療従事者が外国人の治療に関わる事項を正確に伝
えることができるよう、必要最低限の内容を16ヶ国語に翻
訳。受付での会話、受診理由、症状、麻酔や抜歯の経験など
の内容が1言語19頁にわたり掲載されています。

B5版 325頁 定価 5,250円 (税込み)



9ヶ国語対応 服薬指導の本

英語、スペイン語、ポルトガル語、ベルシヤ語、中国語、
韓国語、タイ語、フィリピン語、ベトナム語、

外国人に安全に薬を服用してもらうため、また外国人に薬の
使用法を正確に伝えるため、必要な情報を掲載。どのような
薬が欲しいのか、病歴・アレルギーの有無、定期的に服用し
ている薬、服用時の注意事項、副作用の説明などを9ヶ国語
に翻訳。日本人が世界各国へ旅行や海外出張に行く場合にも
便利です。

B5版 154頁 定価 5,250円 (税込み)

内科 消化器科 整形外科 神経内科
精神科 理学診療科



医療法人社団 永生会
永生病院

脳ドック
老人保健施設
イマジン開設

774床

◆人間ドック 企業健診◆

〒193-0942 東京都八王子市栲田町 583-15
TEL 0426-61-4108



医療法人社団

**三好耳鼻咽喉科
クリニック**

院長 三好 彰

〒981-3133 仙台市泉区泉中央 1-23-6

みなよい みよしさん

TEL 022-374-3443

FAX 022-378-3886

有限会社 **都 商 会**

- | | | |
|-------|----------------------------|----------------|
| サリー薬局 | 〒214-0021 川崎市多摩区宿河原 2-31-3 | ☎ 044-933-0207 |
| エリー薬局 | 〒214-0001 川崎市多摩区菅 6-13-4 | ☎ 044-945-7007 |
| マリ薬局 | 〒214-0036 川崎市多摩区南生田 7-20-2 | ☎ 044-900-2170 |
| 十字路薬局 | 〒211-0068 川崎市中原区小杉御殿町 2-96 | ☎ 044-722-1156 |
| セリー薬局 | 〒216-0003 川崎市宮前区有馬 5-18-22 | ☎ 044-854-9131 |
| アミー薬局 | 〒242-0005 大和市西鶴間 3-5-6-114 | ☎ 0462-64-9381 |
| マオー薬局 | 〒242-0021 大和市中央 5-4-24 | ☎ 0462-63-1611 |



お手本は、
自然の中にありました。



小さな知恵から、
豊かな未来へ。

全農

♣ 消化器科・外科・小児科 ♣

小林国際クリニック

Kobayashi International Clinic

小林国際医院

診療時間：平 日 月曜日～金曜日 9:15～12:00 / 14:00～17:00

土曜日 9:15～13:00

休診日 水曜日、日曜日、祝祭日

☎ **0462-63-1380**

神奈川県大和市西鶴間 3-5-6-110
小田急江ノ島線・鶴間駅下車徒歩4分

本年もよろしく申し上げます

1998年中は皆様よりご支援、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。お陰さまでアジア、アフリカ、南アメリカ約16カ国の開発途上国で、地域開発活動として診療、保健衛生教育、自立支援あるいは子ども病院、小学校の建設等プロジェクトを行うことができました。さらには下記のような自然災害による被災者への緊急救援や国内における緊急時対応のための会議、訓練を実施することができました。

地域開発活動は短期間で完結できるものではなく、

現地で長く活動を続けることが大切な活動です。また緊急救援活動は災害発生後できるだけ早い対応が必要とされます。これらの活動は21世紀に生きる子どもたちのためにできるだけ平和な環境を作り出すことができればという願いのもとに行ってまいりましたし、これからは継続していきたいとスタッフ全員考えております。

どうぞ1999年も引き続きご支援、ご指導下さいますようお願いいたします。

1998年 緊急救援活動および主なとりくみ

※継続プロジェクトを除く

年	月	活動内容／訪問先、または開催地（期間）	
98	1	中国河北省地震緊急救援プロジェクト開始 第二回民間医療防災フォーラム開催／東京・岡山 主催（地域防災民間緊急医療ネットワーク）	
	2	第一回「国民参加型ODA」フォーラム開催／東京・岡山 アフガニスタン震災緊急救援プロジェクト開始	
	3	国際協力ネットワークセミナー広島（JANAN 設立記念フォーラム）開催／広島 AMDA 兵庫県支部設立 AMDA ザンビア支部開所式	
	4	北朝鮮物資支援実施 アフガニスタンアズロプロジェクト開始（アフガニスタン帰還難民支援）※病院建設	
	5	ポリビア震災緊急救援プロジェクト開始	
	6	インドサイクロン援助物資空輸 サハ洪水被災者救援緊急物資空輸	
	7	第2回 NGO カレッジ開催 パプアニューギニア津波災害緊急救援プロジェクト	
	8	地域防災民間緊急医療ネットワークとして全日病と共に全日病北海道支部病院防災訓練に参加。茨城県との防災訓練は水害のために中止し、水戸市内の被害調査を実施。	
	9	地域防災民間緊急医療ネットワークとして東京都・埼玉県・静岡県防災訓練に参加。 バングラデシュ洪水緊急救援プロジェクト開始	
	11		中国江西省久江市水害視察（玉野市）
			ネパール子ども病院開所式・付属障害児学校起工式（11/2） ミャンマー子ども病院起工式（11/20）
		中米ハリケーン緊急救援プロジェクト開始 「98 おかやま国際貢献NGOサミット」開催（トピアの会）	

募金のお願い

- 1 子ども病院プロジェクト** → 子ども病院建設・母親への育児指導・障害児へのリハビリ
開発途上国では小児科専門病院が不足しており、乳幼児の死亡率が先進国の20倍を超えることもあります。子どもたちとその母親の命と健康のためにー
＜ネパール（今年11月開所）、ウガンダ、ミャンマー（今年11月起工式）＞
- 2 自立支援（ABC-AMDA Bank Complex）プロジェクト** → 職業訓練・小規模融資
一人の経済的自立がその人の心身の健康と家族全員の健康維持に役立ちます。
いつまでも援助に頼らないですむ明日の生活のためにー
＜ザンビア・ウガンダ・ケニア・ルワンダ・カンボジア（地雷被災者の自立支援）など＞
- 3 地域医療支援プロジェクト** → 開発途上国での巡回診療・病院建設・医療スタッフ育成等
AMDAは21ヶ国の支部と協力し多国籍医療団による医療支援活動を続けています。
- 4 地域開発プロジェクト** → 上下水道・浄水器の整備・仮設住宅の建設
世界には飲み水が原因の病気が死亡理由の一位に上がる地域も有ります。
人々の生活環境の改善や住宅の確保のためにー
- 5 緊急救援プロジェクト** → 被災者への医療支援・物資支援・復興支援
自然災害はいつ何時起こるかわからないため、事前に予算の準備ができないことが迅速な活動の妨げとなっています。現地に赴く派遣者を支え、被災者にいち早く支援を届けるためにー



ミャンマー給食プロジェクト

あなたのご協力で実現できます。

- 100円で抗生物質が60錠（バングラデシュ）
- 200円で小学校に教科書が1冊（カンボジア）
- 1000円で、一人の子どもに1ヶ月栄養給食（ミャンマー）
- 10000円で1ヶ月ストリートチルドレンへの診療（ネパール）
- 30000円で、職業訓練用のミシン1台（ケニア）
- 50000円で難民用仮設住宅一戸分（ルワンダ）

上記の活動にご協力をお願いします場合には、通信欄に1～5の番号をご記入の上、下記の口座へお振り込み下さい。皆様からのご寄付に対して、課税優遇措置を受けることができるようになりました。詳しくはAMDA事務局（電話086-284-7730）までお問い合わせ下さい。

AMDAは皆様の心を大きな国際協力の力として開発途上国の人たちに届けます

AMDA Journal に関するお問い合わせは、AMDA広報局 TEL 086-284-7730 まで

ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用になるか、下記口座をご利用下さい。いずれも振込目的を明記して下さい。

- 中国銀行一宮支店（普通） 口座番号1272011 口座名 AMDA
- 第一勧業銀行岡山支店（普通） 口座番号1816947 口座名 AMDA
- クレジットカード（全日信販のAMDAカード）での会費納入方法もあります。

AMDAカードについてのお問い合わせは、全日信販株式会社 本社営業部 086-227-7161です。

AMDAホームページ
<http://www.amda.or.jp>

NEO TRADITIONAL

古き良き時代のレーシングフィールドの興奮を現代に、

“本物だけが、歴史を創造する。”人間と機械の優雅なハーモニー。

伝統の優れた機能を最新の技術で引き出し、古典的な優美さを芸術性豊かに醸し出す。

・ **ネオ・トラディショナル レーシングタイプドラムブレーキ**



KR kanrin (株)カンリン 〒702-8001 岡山市沖元464
TEL.086-274-3056 FAX.086-277-8115

クラッチの頂点を駆ける。



OS Racing Power Unit & Parts Development
GIKEN Co., Ltd.

〒702-8001 岡山市沖元464 TEL.086-277-6609 FAX.086-277-8115



第12回環境庁長官賞 (中学生の部)
岐阜県高山市 松倉中学校2年 大附 仁美さん

全国の小・中学生のみなさんに、美しい自然のシンボルであるトンボの絵を描くことを通して、観察する力や創作する楽しさの育成と、失われつつあるかけがえのない自然と生き物の大切さを啓蒙しています。

自然が好きだ トンボが好きだ
WE LOVE TOMBOW

- 主催:朝日新聞社・朝日学生新聞社
- 後援:文部省・環境庁・全国都道府県教育委員会連合会・全国市町村教育委員会連合会
全国連合小学校長会・全日本中学校長会・日本トンボ学会・トンボと自然を考える会
世界自然保護基金日本委員会 (WWF Japan) ・日本PTA全国協議会・森林文化協会
- 協力:学習研究社・サクラクレパス

 **ティコク株式会社**

〒700-0901 岡山市本町6-36第一セントラルビル4F
TEL.086-232-0311 FAX.086-225-6691

インターネットで第13回絵画コンクールの入賞作品がご覧になれます。 <http://www.fcc.co.jp/teikoku>

1999年1月1日発行 (毎月1日発行) VOL.22 No.1 1995年11月27日 第三種郵便物認可 定価800円
発行/エト企画 編集/AMDA 〒701-1202 岡山市精華1-1 TEL.086-284-7730 FAX.086-284-8959

AMDAホームページ
<http://www.amda.or.jp>